インダス文明の形成とバローチスターン文化（1）
―研究史を振り返りながら

The Formation of Indus Civilization and Balochistan Cultures (1):
Current Study and Some Issues.

宗墓　秀明

SHUDAI Hideaki

インダス文明研究は、ここ数年飛躍的な展開を見せている。そこには日本人研究者自らが現地での発掘を伴う資料獲得と、アフガニスタン内戦以降の南アジア治安情勢の悪化に伴って、現地調査の中段または調査地の移動を余儀なくされた結果、これまでに得た大量の調査資料の検討作業が進展したことを理由としてあげられる。しかしながら、筆者には急激な研究の進展が研究の視野を狭めたようにも感じられる。従来のインダス文明研究は発展段階論または進化論的にバローチスターン（Balochistan）諸文化の探求とその結果としてのインダス文明成立を視点としていた。近年では両地域の文化的統合または統合過程の結果として文明の成立が語られる。それはウルク・ワールド・システム論やグローバル・ヒストリー論の影響を受けた新しい歴史学・考古学の方法を示している。しかし、統合された、吸収された側の視点が欠けているのではないだろうか。なぜ、バローチスター丘陵の諸文化はインダス文明に吸収・統合されたのか、その一方でクッリ（Kulli）文化の丘陵地での展開を説明出来ないでいる。

本稿の視座は、インダス（Indus）川流域平原（以下、インダス平原と表記する）の西方に広がる丘陵地に興った南アジア最古の新石器文化を淵源とするバローチスターン丘陵の文化がインダス文明形成にどのような影響を与え、また寄与したかをこれまでの様々な研究を検討し、そこにどのような課題が残され、それらにたいする筆者の見解を示すことであり、また次のような目的がある。

インダス文明の起源を求めて、バローチスターン丘陵での調査が始められたのは、インダス文明の主要都市遺跡であるモエンジョ･ダロ（Moenjo-daro）とハラッパー（Harappa）の両遺跡が発見されてから 20 年ほど後の 1940 年代後半からである。その後、バローチスターン丘陵では、1970 年代に新石器文化集落から地域拠点集落にまで発展するメヘルガル（Mehrgarh）遺跡が発見され、さらに 80 年代初頭に本格的調査が始められたラフマーン・デーリ（Rahman Dehri）遺跡でもインダス文明を支えたハラッパー文化の初期相が認められたとされた。これらによって、丘陵域に発見された新石器文化以降の文化展開のなかに、文明形成過程を跡付けようとする研究に耳目が集まった。本稿もそうした丘陵域での新石器文化社会の成立とその後の展開に、文明形成の背景を探り、インダス文明の成立過程を南アジア古代史の中に位置づけることを目指したい。

いうならば、近年の研究成果を否定するものではないけれども、今一度初心にかえって南アジア先史研究を見つめ直したいとの思いである。こうした検討を行なうにあたって、インダス文明が興起した南アジア北西部の地理的環境を概観した後に、インダス文明の発見から筆を起こして、その後のインダス文明研究全般を見渡しながらも、主に文明形成に関する研究史を振り返り、かつ、そこに残された課題と論点を提示する。すなわち、インダス文明研究の歴史を今一度振り返り、近年の研究動向に筆者なりの見解を披瀝して、今後の研究の一助となれば幸甚と考え、筆を執った。

地理的環境

1　インダス川流域と周辺地域の地勢

インド亜大陸は、大陸移動によって北上したインド大陸とユーラシア大陸が衝突して生まれた。両大陸の衝突は、その最前線のヒマーラヤ（Himalaya）山脈を現在も隆起させ続け、そして山脈の東西には両大陸の間に生じた南北方向の歪みによって、南北に連なる山塊と谷を幾筋も造り出している。こうして北と東西を山脈と山塊で区切られたインド亜大陸は、現在、インド、パーキスターン、ネパール、それにバングラデーシュなどの国々から構成され、南アジアと呼ばれる。

インド亜大陸北部とその東西での造山活動は、周辺地域からインド亜大陸を地理的に分離する障壁となったが、それでも山塊から流れ下る河川は、インド亜大陸とユーラシア大陸とを結ぶ峠道を少ないながらも造

り出している。同時に、河川は山塊を侵食し、土砂を下流へと運んでインド亜大陸の北部と東西に地味豊かな沖積平野を造り出している。

ヒマーラヤ山脈から流れ下る主な河川は、ガンジス（Ganges）とインダス、ブラフマプトラ（Brahmaputra）である。ガンジス川は、ヒマーラヤ山脈の西部を源にして流れ下り、ベンガル湾へと流下する途上のインド亜大陸北部にガンジス平野を、ブラフマプトラ川はヒマーラヤ山脈東部に発して、ベンガル湾に注ぐ河口にベンガル平野を造り出した。そして、ヒマーラヤ山脈西部を源にするインダス川は、南北に連なる山塊に沿って南流し、アラビア（Arabia）海へと注ぐ大河で、この流域に南アジア最古の文明とされるインダス文明が興った。

インダス川は、下流域に沖積平野を造り出すとともに、その中流域で、やはりヒマーラヤ山脈に端を発し、扇状に並んで流下しながら氾濫原平野を生み出した4つの河川、西からジェーラム（Jhelum）、チャナーブ（Chenab）、ラーヴィー（Ravi）、サトレジ（Sutlej）を合流させている。こうしたインダス川流域の平原は、中流域のパンジャーブ（Punjab）地方と下流域のシンド（Sindh）地方に大きく分けられる。

パンジャーブ地方

パンジャーブ地方の名称は、「5つの川」を意味するヒンディー語の「パーンチ（5）」と「アーブ（川）」に由来し、南西方向に標高約300mから同70mまでの緩やかに傾斜する地域に5つの河川が流れ下る。西方のスレイマーン（Sulaiman）山塊と、東方のタール（Thar）沙漠の間に広がるこの地は、年間平均降水量300～600㎜前後の半乾燥地帯であるが、モンスーンの影響を受ける夏雨地帯の東部から冬雨地帯の西部へと漸移する。タール沙漠の西端には、かつて『リグ・ヴェーダ』に「サラスヴァティー（Sarasvati）川」と記述された大河が流れていたが、現在はガッガル＝ハークラー涸河床（Dry bed of Ghaggar-Hakra）として残されているのみである[1)]。ハラッパー遺跡は、パンジャーブ地方南部のラーヴィー河畔に発見されている。

シンド地方

シンド地方は、サンスクリット語の古名「シンドゥ（Shindu）」に由来する地方名で、インダス川の下流域にあたり、西方のキールタル（Kirthar）山塊と東方のタール沙漠の間に広がる。石灰岩台地が広がるサッカル（Sukkar）以南は、1kmあたり15cmの傾斜しかない非常に平坦な沖積平野で、年間平均降水量は99㎜、夏季の平均最高気温が50℃にも達する高温乾燥地帯である。アラビア海沿岸のインダス河口部には、湿地帯が広がるとともに、キールタル山塊南麓から南北に流れ下ってきた河川によって造り出された扇状地も広がり、インダス平原から西方への往来は比較的容易である。モエンジョ・ダロ遺跡は、シンド地方中部のインダス河畔に発見されている。

バローチスターン丘陵

バローチスターン丘陵は、スレイマーンとキールタルの両山塊の西方、パーキスターン・イスラーム共和国（以下パキスタンと記述する）南西部のバローチスターン州とその北側のハイバル・パフトゥンフワー（Khyber Pakhtunkhwa）州の南端部にかけて、南北に広がる。バローチスターン丘陵は、そのほとんどが標高700m以上の高地にあり、平均気温は冬季で10℃、夏季で27℃と穏やかである。しかし、年間降水量は北部で1000㎜から500㎜、中部・南部で600㎜から250㎜と、南下するに従って減少し、イラン（Iran）国境に近い南部地域の西方では年間80㎜以下の沙漠地帯となる。降水量のほとんどは、12月から3月にかけての冬～春期の降雨・降雪によるもので、年間降水量のうち、夏期南西モンスーンによる降水量は、カラート（Kalat）で21％、クエッタ（Quetta）で12％でしかない［Kureshy 1977: 37-43; Survey of Pakistan 1986］。丘陵上には小さな扇状沖積地がいくつも造り出されているが、規模は小さく、むしろ盆地と呼ぶにふさわしい。冬～春期降雨と春から初夏にかけての雪解け水は、盆地や丘陵麓の耕地を潤している。

こうした気候の丘陵地は、クエッタ北方にある3000m級のザルグーン（Zargun）山系とカラート東方のハルボイ（Harboi）山系、そしてアラビア海へとせまる南方の低丘陵地帯によって、大きく3つの地域に分けられる。北部のジョーブ・ローラーライー（Zhob Loralai）地区とクエッタ地区の北部地域、中部のカラート地域、南部のフズダール（Khuzdar）地域である。

北部では、ザルグーン山系北面から北東へ流れ出るジョーブ（Zhob）川がインダス川右岸のゴーマル（Gomal）平野にいたる一方、クエッタとジョーブ・ローラーライー地域を結ぶようにザルグーン山系を迂回するベジ（Beji）川とナーリ（Nari）川が南流する。

中部では、ハルボイ山系から四方に流れ下る多数の河川の中で、シーリーン川またはシャリナーブ（Shirin or Sharinab）川が北方へ向けて流れ下った後に、イランのヘルマンド（Hilmand）湖をめざして、またナール（Nal）川がハルボイ山系からアラビア海をめざして南流する。ナール川を中流域で合わせたヒンゴール（Hingol）川の他に、ポラーリー（Porali）川とギーダル（Gidar）川もフズダールの北方からアラビア海をめざして南流する。

南部では、ラス・ベーラー（Las Bela）地区がアラビア海に面するが、その西部は東西に連なるマクラー

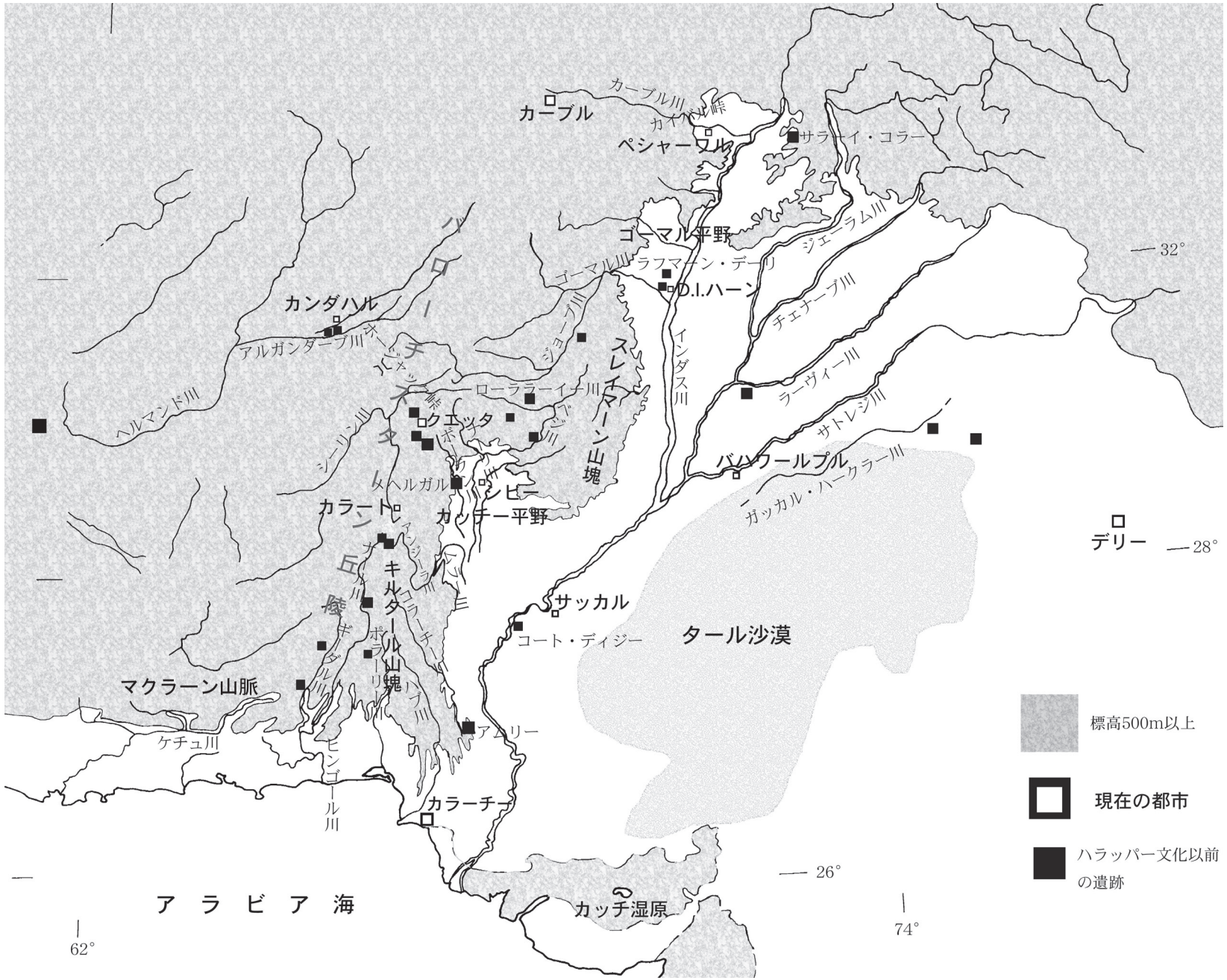

図１　南アジア北西部地形・河川と文明以前の遺跡位置図

ン（Makran）山脈によってアラビア海とは隔てられ、イラン南東部へと低丘陵地帯が続く。各地域には、主要河川が南北に流れ、丘陵の町々をつないでいる。

丘陵域を流れる河川は、ほとんどが南北流するため、東方のインダス平原とバローチスターン丘陵を結ぶ交通路は限られている。北部のボーラン（Bolan）川や中部のアンジーラ（Anjira）川、コラーチー（Kolachi）川、ムラー（Mula）川などが南北に高く聳えるキールタル山塊を抜けて、東のインダス平原へと流れる。なかでもクエッタ北方を源流とするジョーブ川は、北東に流下した後に、東へと流路を変えてゴーマル川と合流するジョーブ渓谷、そしてクエッタ南東を源流とするボーラン川の造りだしたボーラン峠は、クエッタの西方を流れるピシン（Pishin）川が造り出したホージャク（Khojak）峠と共に、アフガニスタン（Afghanistan）のカンダハル（Kandhar）からインダス平原を結ぶ東西交通の要路となっている。そして、これら交通路のインダス平原側には、ゴーマル川によるゴーマル平野とボーラン川によるカッチー（Kachhi）平野が造りだされ、そこでは新石器文化から人々の生活が連綿と続き、インダス文明が進出するまでは地域拠点集落であった諸遺跡が発見されている。

インダス文明および関連遺跡の発見と調査

アジアにおける考古学が、ヨーロッパ各国のアジア地域への政治的・経済的進出をきっかけに近代化を進めたように、南アジア考古学研究も1784年のイギリス人、W.ジョーンズ（Jones）によるベンガル＝アジア協会（Royal Asiatic Society of Bengal）の設立によって、その第一歩を踏み出した。イギリス人らによる、一種のサロンであったベンガル＝アジア協会で紹介されたサンスクリット文学、ブラーフミー碑文、銭貨（コイン）は、ヨーロッパの言語やギリシャ銭貨と類似していたため、ヨーロッパ人たちの興味を強く惹きつけた。この他にも協会では、記念建造物の記録化や先史遺跡・遺物の発見と報告が行なわれ、また円滑な植民地経営を行なうための地誌・地理学書を次々と刊行した。

同協会の活動を礎にして、1861年にインド総督府の一機関として設立されたインド考古局がこれ以降、南アジアでの本格的な考古学調査を始める。初代調査官、後には初代長官となるA.カニンガム（Cunnigham）は、インド亜大陸各地で精力的に調査を行なうが、なかでも鉄道施設工事によって、大量の煉瓦が持ち去られて破壊の進んでいたハラッパー遺跡からインダス式印章や石刃を採集した。これが、インダス文明研究の始まりである[2)]。もっとも、それらがインダス文明の遺物と認識されたのは後年のことであった。

1　インダス文明の発見

文明遺跡の発見 −1920 ～ 30年代

20世紀初頭に、第3代考古局長官となったJ.マーシャル（Marshall）は、エーゲ海（Aegean Sea）周辺での調査経験をもとに、英領インドにおける文化財の保護および調査体制の確立につとめ、インド人研究者を育成しながら組織的発掘調査を行なった。

1920年末、彼の下で育てられたD.R.サハニー（Sahni）はハラッパー遺跡に、R.D.バナルジー（Banerji）はモエンジョ・ダロ遺跡の調査にそれぞれ派遣された。翌1921年には、両遺跡から印章や石刃、彩文土器が発見されたことにより、両遺跡が仏教時代を遥かに遡る銅石器時代の生活跡であることが判明する。1922年から始められたモエンジョ・ダロ遺跡の発掘では、バナルジーとマーシャルが焼成煉瓦で作られた大規模な都市遺跡を掘り出した。しかし、これをどう解釈すべきか、議論の振幅は大きかった。バナルジーは、出土したインダス式印章に刻まれた絵文字的図像をクレタ（Crete）のミノア（Minoa）文明の絵文字と対比させ、モエンジョ・ダロをクレタ文明の影響下にあった遺跡である、と想定した［Banerji 1922-23］。マーシャルは、バナルジーの見解を紹介しながらも、当初はその解釈に慎重な態度を採っていた［Marshall 1924a, 1928］。彼らの発見が、南アジアの人々に自らの住む地域に紀元前にまで遡る先史遺跡の存在を認めさせた意義は確かに大きかったが、直接ミノア文明と比べるのは突飛であった。この後、モエンジョ・ダロとハラッパー両遺跡に発見された都市社会をインダス文明、文明を支えた物質文化をハラッパー文化として、その社会と文化を探る研究が始まる。

C.J.ガット（Gadd）とS.スミス（Smith）は、モエンジョ・ダロやハラッパー遺跡から出土したインダス式印章を集成し、同様の印章が古代メソポタミア（Mesopotamia）文明のキシュ（Kish）、ラガシュ（Lagash）、ウル（Ur）、それにイランのスーサ（Susa）の諸遺跡からも出土していることを報告する。彼らは、印章が出土した古代メソポタミア文明の遺跡年代を指標として、モエンジョ・ダロ遺跡の年代をおおよそ前3000～前2000年頃と比定する［Gadd 1932；Gadd and Smith 1924］。また、R.E.M.ウィーラー（Wheeler）は、古代メソポタミア文明や北西イラン地域との文化交渉があったことを示すインダス文明遺跡の出土品、そしてヴェーダ文献に記述されているアーリアを自称する人々によって破壊された城塞がモエンジョ・ダロなどの焼成煉瓦で作られた遺跡であろうとの想定から、インダス文明の上限を紀元前2500年、下限を紀元前

1500 年までと推定した［Wheeler 1953］。このように、インダス文明都市遺跡の発見当初は、他地域、特にメソポタミアとの比較に基づいて年代比定が行なわれた。

1931 年まで継続されたモエンジョ・ダロ遺跡の発掘調査から得られた成果は、マーシャルと E.J. マッケイ（Mackay）により［Marshall 1931; Mackay 1938］、また 33-34 年に再発掘されたハラッパーの調査成果は、M.A. ヴァッツ（Vats）によって発掘報告書として刊行され［Vats 1940 ］、資料の共有がいち早く図られた。ちなみに、モエンジョ・ダロ遺跡発掘の年次報告としては、［Marshall 1924b, 1925; Marshall, Mackay and Sahni 1927 ］がある。

2　文明以前の遺跡の調査

先行文化を求めて –1940 年代

1940 年代半ばに、英領期最後の考古局長官に任じられたウィーラーは、南アジア考古学に層位学とトレンチ調査の手法を持ち込み、自らハラッパー遺跡の城塞部にトレンチを入れて調査を行なった。調査は城塞の下方にハラッパー文化より古い土器文化を発見し、インダス文明の成り立ちを考える上で重要な発見をもたらした［Wheeler 1947］。また、ウィーラーは、すでにメソポタミア地域に出現していた都市概念がインダス地域にもたらされ、西アジアからの影響に因って南アジアにインダス文明都市が成立した、と説明した［Wheeler 1968: 25, 135］。彼の解釈（「飛翔するアイデア」）は、その後、ほぼ定説となって広がっていく。しかし、都市文明の形成過程が不明なまま、突如として南アジアに都市が出現したとは考え難く、時間を遡って都市形成期の文化、さらに遡る先史文化を求める調査が南アジアで本格的に始まる。

都市文明以前の先史遺跡探究は、すでにメソポタミア周辺地域で始まっていた。主な調査・研究を挙げれば、1936 年に G.V. チャイルド（Childe）が示した「オアシス論」を中心に展開した第二次世界大戦までの研究［Childe 1936］と、戦後の 1947 年から始まる R.J. ブレイドウッド (Braidwood) らによる、ジャルモ (Jarmo) 遺跡の調査から生みだされた「核地帯論」に拠るものであった［Braidwood and Howe 1960］[3)]。「オアシス論」と「核地帯論」はともに、都市文明が興起したメソポタミア周辺地域のザグロス（Zagros）丘陵やトルクメニア（Turkmenia）の乾燥地域において、新石器文化による集住社会の最初の展開が認められると考えた。こうした西アジアでの調査事例を踏まえて、南アジアでもインダス平原の西方に連なるバローチスターン丘陵に、インダス文明の先駆けとなる文化を求める調査が始まる [4)]。

バローチスターン丘陵の調査 –1950 年代

インド亜大陸の北西に位置し、イラン高原とアフガニスタンへと連なるバローチスターン丘陵での本格的な調査は、1940 年代後半から 50 年代にかけて、アメリカの W.A. フェアサーヴィス（Fairservis）とイギリスの B. ド・カルディ（de Cardi）によって行なわれた。

フェアサーヴィスは、バローチスターン丘陵北部のクエッタ市周辺で、キリ・グル・ムハンマド（Kili Gul Mohammad）遺跡とダンブ・サダート（Damb Sadaat）遺跡、ジョーブ・ローラーラーイー地域のペリアーノ・グンダイ (Periano Ghundai) 遺跡とラーナー・グンダイ (Rana Ghundai) 遺跡などの調査を二次に渡って行なった。それらは、キリ・グル・ムハンマド遺跡に無土器新石器文化の発見、つづいてダンブ・サダート遺跡に基壇と周壁を備えた「都市」の発見へと導いた［Fairservis 1956, 1959］。バローチスターン丘陵において、無土器新石器文化から「都市」社会成立に至る先史文化の展開を認めたフェアサーヴィスは、どのようにして丘陵地域の初期農耕文化から平原部にインダス文明が形成されたかを、

1. 外的影響
2. 亜大陸内部の環境
3. 社会的準備

の 3 点に着目しながら、社会経済の「閉鎖的体系」と「開放的体系」というシステム論で解き明かそうとした［Fairservis 1975］。しかし、丘陵域諸遺跡の調査は小規模で、発見された文化内容は断片的であったため、新石器文化農耕の様相や新石器文化がどのように展開して複雑な都市社会を形成したのか、また丘陵域出土の土器群とインダス文明のハラッパー式土器群との関係などが不明のままに残されたことから、フェアサーヴィスは丘陵域の農耕文化とインダス文明との文化的連続性にほぼ否定的であった。それでも、彼の調査は南アジアにおける無土器新石器文化を丘陵域に初めて確認し、さらにダンブ・サダート遺跡とダバル・コート（Dabar Kot）遺跡の最上層にハラッパー式土器を発見したことによって、バローチスターン丘陵の文化とインダス文明が時間的に連続していたことを示した。

ド・カルディは、バローチスターン丘陵中部カラート地方のアンジーラ遺跡やシアー・ダンブ（Siah Damb）遺跡、トガウ（Togau）遺跡に加えて、南部のラス・ベーラー地区での調査を精力的に行ない、バローチスターン丘陵中部から南部の先史文化展開の大枠を示した［de Cardi 1983］。

こうしたフェアサーヴィスとド・カルディの調査は、前 5 千年紀から前 3 千年紀にかけての、バローチスターン丘陵における先史文化土器群の変遷を明らかにし、

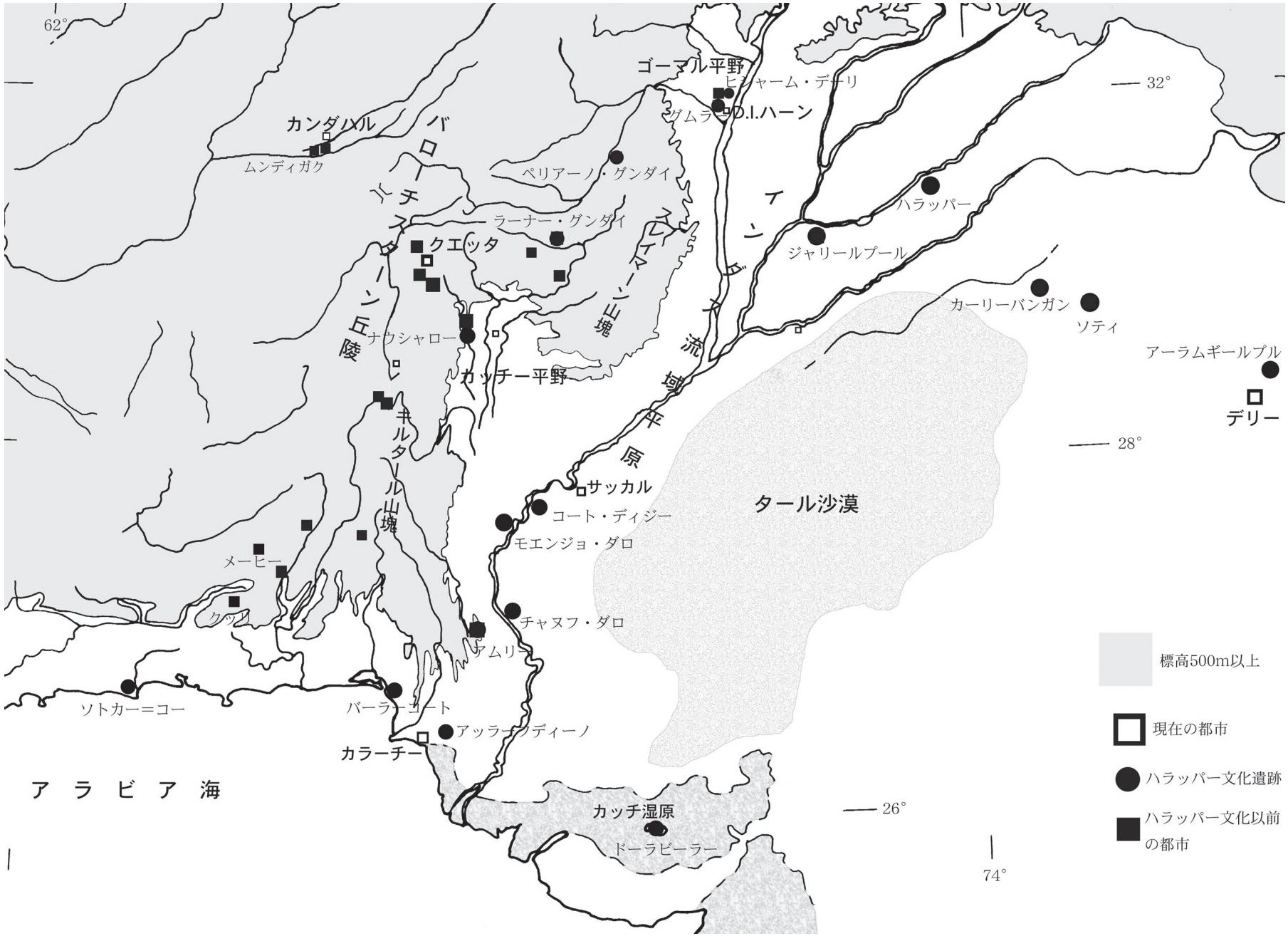

図２　インダス文明関連遺跡位置図

丘陵内各地の地域間文化交渉が広範に広がっていたことを裏付けた。

彼らに続いて、フランスの J.-M. カザル（Casal）は、1959 年から 3 シーズンにわたって、インダス平原に接するバローチスターン丘陵の南東部に位置するアムリー（Amri）遺跡の調査を行なった。インダス平原を間近に見下すアムリー遺跡の発掘は、クリーム色を呈する器表や矩形文様を基本要素とした多色彩文土器が出土する文明以前のⅠ期の後に、ハラッパー式土器を混交するⅡ期、そしてハラッパー式土器のみが出土するインダス文明期のⅢ期までの文化的変遷を示した［Casal 1964］。この調査によって、バローチスターン丘陵の文化とインダス文明・ハラッパー文化との時間的前後関係が一遺跡内の層序に示されたことは重要であった。

他方、M.A. スタイン（Stein）は、1929 年に、目が大きく描かれた牛の土器文様を特徴とするクッリ（Kulli）文化諸遺跡を丘陵域南西方に発見していた［Stein 1931］。文化の名称となったクッリ遺跡やニンドワリー（Nindowari）遺跡のクッリ文化は、他のバローチスターン丘陵の諸遺跡のように、インダス文明期に衰退したり、文明遺跡へと変転せず、文明の中葉以降までインダス文明と併存して存続する。バッカール・ブーティ（Bakkar Buthi）遺跡では、ハラッパー式土器が出土する文化層の上にクッリ式とハラッパー式土器が混交する文化層があると報じられ、クッリ文化とインダス文明との関係が如実に示されている［Franke-Vogt, Ul-Haq and Khattak 2000］[5]。

3　平原部の調査

コート・ディジー文化の発見 −1950 〜 60 年代

バローチスターン丘陵の調査から得られた成果だけでは、初期農耕から文明形成への道程を跡付ける研究に行き詰まりが生じていた頃、モエンジョ・ダロ遺跡を対岸に臨むインダス川東岸に、文明以前の初期の都市遺跡が発見されて、文明形成過程の理解とその源流を求める研究に大きな衝撃を与えた。F.A. ハーン（Khan）が 1956 年から 57 年にかけて行なった、コート・ディジー（Kot Diji）遺跡の調査がそれである。

調査では、インダス本流域に立地する遺跡の下層にインダス文明以前の周壁を伴う都市が、上層にインダス文明都市が発見され、インダス平原の一遺跡内に層序をもって文明以前と文明期の都市文化が存在したことを示す最初の遺跡となった［Khan 1965］。ハーンによってコート・ディジー文化と名付けられた遺跡下層文化は、その後の調査によって、コート・ディジー遺跡のあるシンド地方北部からカーリーバンガン（Kalibangan）などの諸遺跡が発見されたパンジャーブ地方南部やガッガル＝ハークラー涸河床沿いにまで広がっていたと認識されるようになる。

M.R. ムガル（Mughal）は、コート・ディジー文化が内包し、ハラッパー文化に引き継がれたものとして、鍔付壺や短頸壺を特徴とする土器群と土器文様、稜堡を伴う周壁に囲まれた城塞部と市街地の分離、（日乾）煉瓦の規格化と三角形陶板を挙げ、コート・ディジー文化を「初期ハラッパー文化」と規定した［Mughal 1970］。

1980 年代以降には、ゴーマル平野に位置するラフマーン・デーリ遺跡もまたコート・ディジー文化が展開し、さらにはハラッパー文化へとスムーズに移行した遺跡であったと報告され、「初期ハラッパー文化」もしくはコート・ディジー文化がインダス平原にとどまらず、丘陵麓にまで展開したとする見解が示された［Durrani 1988］。

ハラッパー遺跡の南西 74km、ラーヴィー川南岸に位置するジャリールプール（Jalilpur）遺跡もコート・ディジー文化（初期ハラッパー文化）層を持つ遺跡であるが、その下層にあたるジャリールプールⅠ期に、骨製尖頭器や器壁の厚い粗製土器が出土する初期農耕文化（土器新石器文化）が発見された（ハークラー式土器文化期）［Mughal 1974］[6]。前 4 千年紀まで遡るとされる農耕文化がインダス平原に存在したことは、平原部における初期農耕社会以降の文化展開が文明社会を築き上げたことを想定させる。しかし、ジャリールプールⅠ期からコート・ディジー文化に至る過程には、いまだ不明な点が多く残され、さらにジャリールプールⅠ期とラフマーン・デーリ遺跡のようなバローチスターン丘陵麓の遺跡文化や丘陵上の農耕文化との関係追求も研究課題として残されていた［Allchin and Allchin 1968］[7]。

メヘルガル遺跡の発見 −1970 年代

1977 年の時点においても、なお H.D. サンカリア（Sankalia）は、インダス平原の「初期ハラッパー文化」がイラン東部からの文化的影響によって生起したとしていたが［Sankalia 1977］[8]、インダス文明の形成を南アジア先史文化の展開の中に位置づけようとする調査は着実に進められた。

1970 年代に入ると、カッチー平野にメヘルガル遺跡が発見された。この遺跡は、クエッタ近郊に発見されていたキリ・グル・ムハンマド遺跡の最下層に見られた無土器新石器文化より、さらに年代の遡る紀元前 6000 年頃の無土器新石器文化から前 2600 年頃のバローチスターン丘陵北部地域の盟主的拠点集落までの展開を間断なく示した［Jarrege, J.-F. 1979a・b; Jarrege, J.-F. *et al.* (eds.) 1995］[9]。

メヘルガル遺跡は、バローチスターン丘陵のクエッ

タからインダス平原へとボーラン峠を下った扇状地に立地し、西アジアの初期農耕村落と同様に、季節的な天水を容易に利用できる丘陵麓に生活の基盤を置いている［藤井 2001］。前 5000 年頃のメヘルガル遺跡の農耕は、冬作物のムギ類と夏作物のナツメを栽培し、ウシ、ヒツジやヤギを家畜として利用するもので、現在の南アジア農耕の原形をすでに示している。この農耕文化社会を基盤として、以後、定住度の増した集落と文化がバローチスターン丘陵の各盆地へと展開し、やがて拠点集落を中心とした地域社会がバローチスターン丘陵の各地に形作られたと理解されるようになった[10]。

ハラッパー遺跡の再調査 −1980 年代以降

1980 年代以降には、平原部での調査もインダス文明の理解にとって有益な成果を挙げていた。ハラッパー遺跡の調査では、コート・ディジー文化層がハラッパー文化層直下に発見され、集落プランがコート・ディジー文化からハラッパー文化へと継続的に展開していく様子が研究者の耳目を集めた。

ハラッパー遺跡は、1921-22 年に初めて発掘調査されて以降、小規模なトレンチ調査を除いて、ほとんど発掘されてこなかったが、1986 年より G.F. デイルズ（Dales）を団長とするアメリカ隊が調査を再開し、現在も継続中である。調査は、文明期の都市形態と社会組織を解明するとともに、文明期以前のハラッパー遺跡の文化を探ることに主要眼目が置かれている。

デイルズは、かつてウィーラーが城塞部に入れたトレンチの下層に発見し、後にコート・ディジー文化とされた文化層を積極的に「初期ハラッパー文化」期と解釈し、その始まりを前 3300 年に置いた。続いて都市期のハラッパー文化（すなわちインダス文明）は、前 2600 年頃より前 1900 年頃まで続いた後に、地方文化となった後期に推移して、ハラッパー文化は前 1700 年ごろに衰退した、との理解を示した［Dales *et al.* 1991］。これ以降、アメリカ隊の示したインダス文明の形成年代解釈は、広く受け入れられて今日に至っている。

4　インダス文明形成論議の問題点

平原部の調査では、平原部を開発した初期農耕文化の位置づけと、「初期ハラッパー文化」とハラッパー文化の関係が大きな検討課題である。カーリーバンガン、ソーティー（Sothi）、シスワル（Siswal）遺跡など、パンジャーブ地方からインドのラージャスターン（Rajasthan）地方北部にかけて発見されている「初期ハラッパー文化」（ソーティー文化）[11] のうち、カーリーバンガンはハラッパー文化期城塞下の地山上に厚さ 1.6m の文化層を持っている。そこでは、すでに城塞と思われる遺構のほか、居住域を囲繞する周壁が発見されている［Lal 1979, Lal *et al.* (eds.) 2003］[12]。コート・ディジー遺跡と同様に、大河の氾濫が作り出したパンジャーブ平原に現れたソーティー文化は、肥沃な沖積地の開発を急速に行ない、権力機構の存在を示す城塞と市街地が分離した都市を生み出したが、同じパンジャーブのジャリールプール遺跡 I 期の初期農耕文化とどのような関係を持っていたのかを探らねばならない。

また、「初期ハラッパー文化」を文明形成段階における文化、とくに単一文化として認めうるのかにあたっては、文明のさまざまな要素を文明以前のどのような文化的側面に認めるのかが論者によって異なっているために、議論が複雑になっている。平原部の調査成果は、それぞれの文化段階における諸文化の内実を探る段階から、前後する時期の文化との相関関係を見いだす状況に至っていなかった。

他方、バローチスターン丘陵に発見された数々の遺跡は、無土器新石器文化以降、広範な文化交渉を保ちながら、次第にダンブ・サダートなどの地域拠点を各地に築き上げていくが、クッリ文化遺跡を除いた丘陵域の諸遺跡は、インダス文明との接触過程でハラッパー文化に吸収され、または衰亡したと理解されている。これら諸遺跡の盛衰状況は、フェアサーヴィスが示した社会システムの転換という論理だけでは農耕文化社会から都市文明社会への移行を説明しきれないことを示している。バローチスターン丘陵の諸文化の検討においても、やはり文明以前の文化と文明期の文化との関係に不明な点が残されている。

ただし、バローチスターン丘陵の諸文化には、平原部よりも無土器新石器文化以降の展開に連続した変遷を見ることができる。それゆえに、インダス平原に現れたインダス文明の形成を探るにあたって、丘陵域の文化と社会がインダス文明の形成にどのように係わりを持ちえたのかが、南アジアにおける文明形成を考える際に重要な課題として浮かび上がらせざるをえない。

次節では、文明以前の社会が文明社会へと変化していく過程を捉える一つの有効な手段であると同時に、一旦形成された文明を維持する条件の一つとしても重要な要素であったと考えられる交易を視点として、インダス文明の交易と都市社会に関する先行研究の論点を整理する。

文明形成と交易

インダス文明期の物資管理の一端を示すであろうインダス式印章がメソポタミアの前 3 千年紀後半から前

2 千年紀前半の遺跡文化層から出土することは、インダス文明研究の早い段階から指摘されてきた［Gadd and Smith 1924 ほか］。また、モエンジョ・ダロの南東に位置するチャヌフ・ダロ（Chanhu-daro）遺跡において、多数の紅玉髄製ビーズ玉を発見したマッケイは、同様のビーズ玉がメソポタミア諸遺跡からも出土することを指摘したうえで、それらのビーズ玉がインダス文明社会から持ち込まれた遺物である、と主張した［Mackay 1933、1937］。紅玉髄をはじめとする貴石ビーズ玉の多くがインダス文明からメソポタミア地域へ向けた交易品であったとする見解は、近年、大方の共通認識となっている［Ratnagar 1991, 2004］。インダス文明の成立と展開を理解するには、当時の交易活動の解明が不可欠な課題である。

南西アジア交易網の成立対外

インダス文明をめぐる交易に関しては、イランのケルマーン（Kerman）地方に産出する緑泥石で作られた石製容器の出土分布から、インダス文明、とくにモエンジョ・ダロと西方世界との関わりを指摘した F.A. ドゥラーニー（Durrani）の論稿を嚆矢とする［Durrani 1964］。

C.C. ランバーグ＝カルロフスキー（Lamberg-Karlovsky）は、1967 年から 4 次にわたってケルマーンのテペ・ヤヒヤー（Tepe Yahya）遺跡の調査を行ない、石製容器生産遺跡の発見を報じた［Lamberg-Karlovsky 1970］。また、L- カルロフスキーと M. トッシー（Tosi）は、イタリア隊が調査するイラン東部、シースターン（Sistan）地方のラピス・ラズリ加工地でもあるシャハリ・ソフター（Shahr-i Sokhta）遺跡の調査成果を取り入れて、イラン高原を中心とした南アジアからメソポタミアに至る前 3 千年紀前半の交易路を想定した［Lamberg-Karlovsky and Tosi 1973］。

P.L. コール（Kohl）も石製容器の交易が前 3 千年紀の西アジア世界に与えた影響を論じた［Kohl 1975］。コールは、テペ･ヤヒヤーの緑泥石製容器だけでなく、他の製作地を想定させる滑石製容器の存在を指摘するとともに、広範な地域から出土する石製容器に通文化的様式を成立させるほど交易のおよぼす影響が強かった、と指摘している［Kohl 1979］。同時に、彼は交易路、または交易路結節点の移動が文明の盛衰に影響を与えたであろうとし、前 3 千年紀末から前 2 千年紀前半における、ペルシア（Persia）湾内の石製容器の交易拠点がバハレーン（Bahrain）島からファイラカ（Failaka）島へ移動したことによって、インダス文明の衰退が招かれた、と想定した［Kohl 1986］。

他方、トッシーは広範な地域の文化と文明に影響を与えたとされ、インダス文明と関わる交易活動の中でも重要な交易対象であったラピス・ラズリの産出地を、バダクシャーン（Badakhshan）であるとした［Tosi 1970］。また、70 年代後半には、D.K. チャクラバルティーが南アジアより出土したラピス・ラズリを精力的に精査・集成する［Chakrabarti 1978, 1979］。チャクラバルティーの出土遺物研究の背景には、H.P. フランクフォートによって行なわれていたショルトガイ（Shortughai）遺跡の調査成果がある。バダクシャーンに隣接したバクトリア（Bactria）地方に位置するショルトガイ遺跡の調査は、インダス文明がラピス・ラズリの交易に深く関わっていたことを予測させるものであった［Francfort 1978-79］。

後年、M. カサノヴァが行なった成分分析によって、シャハリ・ソフター遺跡などから出土するラピス・ラズリは、バダクシャーン産である可能性が大である［Casanova 1992］とされると、L- カルロフスキーはテペ・ヤヒヤーでの調査成果を基に、多くのラピス・ラズリ製ビーズ玉の未成品や攻玉ドリルが出土するシャハリ･ソフター遺跡、テペ･ヤヒヤー遺跡とホラーサーン（Khorasan）のテペ・ヒサル（Tepe Hissar）遺跡が、ラピス・ラズリ製ビーズ玉の加工製作地であると同時に、交易路の結節点としての役割を担っていた、とした［Lamberg-Karlovsky 1994］。

これらの調査・研究成果をまとめた S.G. シェイファー（Shaffer）は、貴石と鉱物資源をめぐる南西アジア交易路は、前 3 千年紀中頃には成立していた、とする［Shaffer 1982］。そして、イラン高原のシャハダード（Shahdad）遺跡を論じた A. ハケミ（Hakemi）は、インダス文明と西アジアやイラン、アフガニスタンなど、西方との交易関係は、とくに内陸ルートに関して、バローチスターンを間において考えねばならならず、また前 3 千年紀を中心とする西アジアからインダス文明領域におよぶ広域交易路成立の背景には、各種物資の集散を必要とする開放体系社会の都市の勃興があったとして、都市の勃興と遠隔地間交易との相関関係を指摘した［Hakemi 1992］。

南西アジア交易とその形態

トッシーは、前 3 千年紀後半のイラン高原における遠隔地間交易路の想定［Lamberg-Karlovsky and Tosi 1973］を踏まえて、前 4 千年紀末から前 3 千年紀前半の東部イラン高原からインダス平原においての都市形成に多大な影響を与えたであろう文化交渉の枠組みが、前 3 千年紀中頃にそれまで小規模な遺跡ばかりだった東部イラン、南トルクメニア、東部エルブールズ（Elburz）それにヘルマンド川流域地域に、シャハリ・ソフター遺跡のような 50 ヘクタールを越す大規模集落を現出させた、とした。トッシーは、そのような前 4000 年以降の社会・文化変遷を「先都市期（後期金石併用期）」から「原都市期（初期青銅器時代）」、

「都市期（中期青銅器時代Ⅰ）」、さらに「後都市期（中期青銅器時代Ⅱ）」として把握することを試みる。その上で、東部イランと北西インドは、「原都市期」に遠距離交易を通じて相互に影響・依存しあい、いわば両地域が細胞内共同体として、文化的基盤を共有していたとした。その結果として、東部イランから北西インドにかけての地域に、大規模集落としてのシャハリ・ソフター遺跡が出現する一方で、バローチスターン丘陵の文化は東部イランの諸文化が隆盛した時期、またはインダス文明の繁栄した時期など、その時々によって東部イランとインダス平原の仲介者として、その文化的様相を変貌させる辺境であった、とした［Tosi 1979］。

トッシーと同様に、E. コルテーシ（Cortesi）らは、イラン高原と南アジアの交易と文化的影響関係を指摘しながらも、シャハリ・ソフター遺跡出土品に見られるインダス平原とバローチスターン丘陵地域文化遺物を検討しながら、具体的に両者の関係を論じた［Cortesi *et al.* 2008］。コルテーシらは、シャハリ・ソフター遺跡にもたらされた、またはシャハリ・ソフター遺跡の人々が取り入れた文化遺物、すなわちナール式類似土器、ジョーブ式類似土偶、三角陶板、インダス文明に特有な区画文印章の変形タイプ（格子文、同心円文、十字文）[13]、凍石製ビーズ玉、ねずみ取り、賽子、貝製細工品、インダス文字の刻まれた円筒印章などを検討して、両地域の文化的接触と交易の有様を示した。それによれば、両地域は前3千年紀を通して文化的接触を保ち続けたが、接触の意味内容が時期によって異なっていたという。つまり、コート・ディジー文化併行期であるⅡ期のシャハリ・ソフター遺跡では、上記のような模倣製品である類似土器や類似土偶を製作していたが、インダス文明が興起した時期に相当するⅢ期では貝製細工品、ファイアンス製腕輪、腐食文様紅玉髄玉、象牙玉などのインダス文明領域で生産された装飾品が威信財としてもたらされて、両地域がそれぞれ「文化圏」として捉えられる地域間の交易であったとする。そして、彼らはインダス文明の交易は、文明興隆以前の南西アジア交易を前提として、その交易に主体的に参入することでインダス文明が生まれたであろう、としている。交易の内実が地域間交渉の考察において重要であることを強く示す論考であるが、コルテーシらにあってもバローチスターン丘陵の文化は、やはりヘルマンド川流域の東部イランとインダス平原地域との仲介者であった、としている。

コルテーシが取り上げた区画文印章については、カラ・デペ（Kara Depe）遺跡のナマーズガー（Namazga）Ⅲ期併行期に土製のものが初めて出土して以後、南トルクメニアのアルティン・デペ（Altin Depe）遺跡などからも土製や石製、青銅製の類例が数多く出土する［Gupta 1979b: 95-120］。後藤はそれらがインダス文明に先立つ時期のムンディガク（Mundigak）遺跡、シャハリ・ソフター遺跡、メヘルガル遺跡、ダンブ・サダート遺跡、それにバンプール（Bampur）遺跡といったアフガニスタンからバローチスターン、そしてイラン南東部にかけての諸遺跡からも出土することをもって「中央アジア式」印章と名付け、その出土状況が広域交易とその文化交渉圏の範囲を示す遺物である、とした［後藤 1997, 1999a］。上杉は、区画文印章に「イラン型ボタン」印章の名称を用いながらも、後藤と同様に、その分布を示して、前3千年紀前半のイラン高原からバローチスターン丘陵におよぶ広範な地域での文化交渉の存在を示している（図5）［Uesugi 2008］。

シェイファーは、イラン高原からさらに西方のメソポタミアと文明成立後のインダス平原との接触を示す疑いなき遺物として、インダス式凍石製印章、および紅玉髄の長棗玉と腐食文様ビーズ玉を挙げる［Shaffer 1982］。また、彼はインダス文明とメソポタミア地域の接触・交易形態については、遊牧民が介在する仲介者交易であったとする一方、メソポタミアとイランの交易は直接的な使者交易であるが、インダス文明がそうした交易に直接参入した証拠は限られている、とする[14]。加えて、インダス文明は、トルコ石とラピス・ラズリを除いて、メソポタミアが域外交易で入手していた鉱物資源をインダス文明圏内の域内交易で獲得したとする［同上論文］。このインダス文明期のインダス平原からメソポタミアにおよぶ広域遠隔地間交易形態について後藤は、遊牧民に代わってイラン高原のエラム（Elam）文明が中心地機能を持った仲介者として現れた、と主張し、交易中心地はシャハダード遺跡であった、とする［後藤 1999a］。

陸上交易の重要性を指摘する上記までの見解がある一方、マクラーン海岸沿いには、ソトカーゲン＝ドール（Sutkagen-dor）やソトカー＝コー（Sotka-kho）遺跡といったインダス文明遺跡が存在することから、インダス文明期には沿岸航海によるアラビア海上交易の存在を想定できる。早くは小西がJ. ビビー（Bibby）による Looking for Dilmun［ビビー 1975］の見解を前提として[15]、現在のバハレーンとオマーン（Oman）半島を中継地とするインダス川流域からメソポタミアにかけての海上交易路の重要性を指摘している［小西 1977-78］。さらに、インダス文明期の海上交易については、アラビア半島とのつながりを意識したものとして、A.H. ダーニー（Dani）と S.R. ラーオ（Rao）の研究もある［Dani 1986; Rao 1986］。

このように、アラビア海沿岸までを文明版図としたインダス文明の社会は、西方との交換・交易に内陸路

だけでなく、海路も利用し、バローチスターン丘陵の地域拠点集落社会とは異なる多様な交換・交易路に結び付いていたと予想できる。このことがどのように文明形成と関わっていたのかについて［Ratnagar 1991］は、域外との交換・交易で求められた品々の生産を可能ならしめた高度な工芸活動の維持と管理がインダス平原の社会に重層した複雑な階層社会を産み出し、同時にそうした社会をまとめるための統治組織の成立が文明形成の大きな要因であった、とする。

2000 年代以降の研究

近年の研究動向に関しては、チャクラバルティ［Chakrabarti 2018］や上杉［Uesugi 2018、上杉 2020］がそれぞれの視点に沿ってまとめているが、以下では文明形成と文化交渉・交易に関する論考に重点を置きながら関連する論考も取り上げる。

文明社会と工芸活動

上に記したように南アジアを含めた海外での研究、特に欧米の研究動向は、アフガニスタン内戦から始まる政情の不安定化、タリバーンの台頭、アフガン戦争といった 20 世紀最末期以降のアフガニスタンとパキスタン国内での治安の不安定化がインダス文明の多くの遺跡を抱えたパキスタン領内での調査を危険なものとし、調査の中断や撤退をやむなきものとなさしめた。

それでも、バローチスターン丘陵では、ドイツの U. フランケ＝フォクト（Franke-Vogt）を中心としたバローチスターン丘陵の諸文化を探る調査が 2000 年頃より行なわれている［Franke-Vogt *et al.* 2000; Franke-Vogt and Ibrahim 2005］。彼女らは、南バローチスターンを中心に、かつて調査されたクッリ、およびナール（Nal または Sohr Damb）両遺跡関連文化遺跡の調査をもって、バローチスターン丘陵の諸文化をインダス文明形成論議の俎上に再び載せようとした。しかし、近年の政情不安からやはり調査を休止せざるをえなくなっている。また、バローチスターン丘陵諸文化と南東部イランとの関係をマクラーン地方のミリ・カラート（Miri Qalat）とシャーヒ・トゥンプ（Shahi Tump）両遺跡に探ろうとしていたフランス隊の R. ブザンヴァル（Besenval）の調査もやはり政情不安から休止してしまった［Besenval 1992, 1994, 1997、2000, 2005; Besenval and Marquis 1993; Besenval and Desse 1995; Besenval *et al.* 2005; Mille, Bourgari and Besenval 2005］。さらに、メヘルガル遺跡調査を継続していたフランス隊の現場事務所や収蔵庫が襲撃され、出土遺物が骨董マーケットに出回るようにもなった。こうしてバローチスターン丘陵では、不安定な政治・治安状況がかつて調査された遺跡の層位的再発掘と新たな資料獲得を目指した調査の続行を困難なものとし、研究の進展を阻む原因となっている。

こうした状況下で、インダス平原部ではデイルズ亡き後、ハラッパー遺跡の調査を引き継いだケノイヤーらが次々とその調査成果を公表し、パンジャーブ地方におけるインダス文明の生成と衰退に関する資料を積みかさねている［Kenoyer 1991; Meadow *et al.* (eds.) 1996; etc］。そして、ケノイヤーを中心としてインダス文明理解を大局から見直す作業が示される。ケノイヤーは民族学的考察をまじえて長年おこなってきた工芸活動研究にもとづいて、インダス文明社会の階層化と人的結合および集団管理に視点を据えて、インダス文明社会に公的管理と私的管理が存在することを指摘し［Kenoyer, J.M., M. Vidale and K.K. Bhan 1991］、そうした社会構造を前提に複数の言語体系を有する居住者の存在を推定し、居住地の階層化・印章の使用・度量衡の設定、そして文字の使用という 4 点に注目しながら部族指導者の存在と彼らの連合による国家体制を想定する［Kenoyer 2008］。

また、シェイファーが提示し［Shaffer 1992］、ケノイヤーがインダス文明の工芸活動を論じる際に用いる文明の「伝統」という用語を用いつつ、ヴィダーレも貴石ビーズ製作、土器製作、石器製作、貝細工製作を題材として原材の入手とそのルート、製作集団の構成とその統括、都市内占地空間と継続期間、そして流通の視点から文明の社会構造を探ろうとする大著を著し、「インダス文明論議の多くは過去の古い仮説に縛られており、（中略）南アジアにおける国家形成過程の本質を当該地の考古学的証左に基づいて独自に生み出す必要がある」と説いている［Vidale 2000：15］。また、イランのシャハリ・ソフター遺跡におけるラピス・ラズリ攻玉に関する詳細な報告を収蔵庫内の資料調査を経て行なっている［Vidale and Lazzari (eds.) 2017］。

ミラーも土器を中心とした工芸活動の痕跡から、インダス文明都市における工芸を利用技術に従って 1. 石器や貝細工のような作出作業、2. 金属加工や土器製作のような熱変性作業、3. 凍石やファイアンスのような作出と熱変性を伴う作業の 3 つにグループ化して把握する。それによって各グループ内での技術と知識の共有、そこからもたらされる製品価値があったものと想定する［Miller　2007、2009］。

交易と文化交渉

こうした文明社会構造を都市内工芸活動にかかわる諸活動と都市内空間配置などから探る研究とともに、工芸活動における原材料入手と分配における交易に関しても現地調査活動の停止や休止に伴ってあらためて、まとめと考察が行なわれている。なかでもインダス文明と湾岸地域との関わりにおいて、その間に位

置するバローチスターンのクッリ文化に焦点を当てた論考がライトと上杉によって度々論じられる［Writght 2013、2016；Uesugi 2019 など］。上杉の論考については国内研究とともに後述する。ここではライトの見解について触れておく。ライトは交換概念の歴史を振り返り、台頭した前 3 千年紀後半での経済行為としての交換体系の確立を指摘したポセールによりながら、クッリ文化がインダスとイラン高原のコナール・サンダル南（Konar Sandal South）遺跡の事例を引いて、クッリ文化が西方世界との商業的交換の仲介役の立場にあったとした。ただし、イラン高原とバローチスターンとの密接な交易関係を示すものであり、インダス文明とクッリ文化の関係は単純に経済的要因だけに限定出来るものではなく、個人や集団などのレヴェルが多様であったとする。それでもなお、コナール・サンダルのイラン高原とバローチスターンのニンドワリー（Nindwari）、インダス平原のラカン・ジョ・ダロー（Lakhan Jo Daro）から白色の球状分銅が出土し、それらの地域間での物資流通の存在を指摘すると同時に、インダス文明の立方体分銅の単位と異なる球状分銅の存在が異なる度量衡制度を併用していたことを示した。

度量衡体系の併存は異なる文化間の交換が恒常的に、また経済行為として行なわれたことを前提としてはじめてその存在理由があるのであって、インダス文明地域とイラン高原との交換は頻繁に行なわれ、そこにバローチスターンのクッリ文化が介在していたことの証左である。

インダス平原と西方との関係を内包しながらも、文明圏とその周辺を対象としたいわば域内物流研究に大きく貢献した考究が R. ロウ（Law）によって行われている。2000 年代初頭よりハラッパー遺跡から出土する石製工芸品の石材産出地の同定を進めてきたロウは、地方政府の護衛を伴いながらパキスタンの山岳地帯に存する鉱物産出地の同定作業から文明期出土石材の産地同定と交易の様子を描き出した［Law 2002、2005a、2005b、2006、2011；Law and R.H. Baqri 2003；Law, R.H. Baqri, K. Mohamood and M. Khan 2005；Law and J.H. Burton 2006a、2006b、2008；Low, A. Carter, K. Bhan, A. Malik and M. Glasock 2013 ほか］。

国内での研究も 2000 年に開催された四大文明展を契機として、それまでの研究成果がまとめられて一定の方向性を示した。こうした従来の研究成果のまとめを基礎として、インダス文明関連遺跡の発掘調査を行なってこなかった日本国内の研究者は、公刊資料に基づいて着実な研究を進めてきた。なかでも、編年の確立を目指した土器研究とイラン高原からインダス平原にかけての文化交渉に関する論考が目をひく。小茄子川と上杉によるバローチスターン丘陵のクエッタ式土器とインダス文明のハラッパー式土器の間に文様の継承があったとする研究は、彼らのその後の研究と文明形成理解の基礎となって、展開されていくが、詳しくは後述する［上杉・小茄子川 2008、小茄子川 2008a］。

こうした文明展以降の若手研究者による文明形成論と文明研究は、総合地球環境学研究所のインド領内でのインダス文明遺跡調査に参加した若手研究者とそれに刺激を受けた同世代の研究者による活動によってより活発化し、新たな研究段階への進展を示す。彼らは自らが調査し、手に入れた実物資料をそれまでの研究成果を踏まえて検討し、土器文様や印章、貴石ビーズなどの製作工程復元を前提とした緻密な分類をすすめた。それは文明形成期と文明期を分期し、文明の動的展開を示すとともに、そうした調査成果と自説を携えながら、インド、パキスタン、欧米諸国の調査成果との比較と検討を積極的に行なうようになった［上杉 2008、2013、2015；Uesugi　2012、2013；上杉・小茄子川 2008；Uesugi, M. Kumar and V. Dangi　2017；小磯 2008a、2008b；小磯・小茄子川 2009；小茄子川 2007、2008a、2008b、2011、2012；Konasugawa and Koiso 2018；近藤・上杉・小茄子川 2007；野口・マッラー・ヴィーサル・横山・千葉・下岡・シェイフ・近藤英夫 2017 など］。

これらで論じられたのは、かつて初期ハラッパー文化と名付けられたコート・ディジー遺跡に代表される物質文化と社会が基礎となってハラッパー文化、インダス文明がインダス平原に生まれたとする理解に大きく変更を迫るものである。それは筆者が示した初期ハラッパー文化とされた文化がゴーマル平野、パンジャーブ地方、シンド地方の地域ごとに異なる文化であるとする見解を下敷きにしながらも、シンド地方とバローチスターン丘陵、それもクエッタ地域を中心としてカッチー平野にまで拡がった文化を取り込む、またはバローチスターン丘陵を介した西方交易に触発されて生じたとするものである［宗臺 1998；上杉 2008、2020；小茄子川 2013、2016］。上杉は、その後の文明の衰退から歴史時代への展開をも視野に入れて論じている。そうした彼らの研究を論じる際に重要となるのが、土器や工芸品、その交易とともに、文明形成期の環境とそれに応じた農耕についての近年の研究状況である。

環境と農耕

インダス文明を取り巻く環境については、文明の衰退要因としてアラビア海沿岸の地盤隆起という地殻変動に求めたレイケスの論考がいちはやく提示されていた［Raikes 1964、1965］。インダス川の西方地域にある文明遺跡立地点を論拠に、レイケスは文明期の海岸

線が現在よりも 20km 以上も内陸にあったとして、海岸域の隆起が内陸部の大規模洪水をもたらして、文明の衰退をまねいたとした。しかし、現在もその隆起が何時起きたのかは判明していない。その一方で、インダス川の流路とその流域がかつてとは異なるとの見解がある。

フラムを中心とするアメリカ隊は、シンド地方の西方地域シンド・コヒスターンの調査を続けてきた。その成果として、インダス流域のかつての農耕がバローチスターン丘陵のガバルバンド農法を引き継ぐものであったが、文明期のインダス平原の農耕は氾濫農耕に移行したとする［Flam 2013］。その理由として、シンド・コヒスターン地域調査成果と遺跡立地から、かつてのインダス川はより西方を流れたシンド・ナラ（Sindh Nara）とパンジャーブ地方でサトレジ川を合流させたハークラー川がシンド地方を南流するナラ・ナディ（Nara Nadi）川の 2 本の大河であったとした。さらに両大河は南東のカッチ湿原へと流れ込んでいたとする［Flam 1999、2013］。確かに現在のインダス川はモエンジョ・ダロ遺跡をかすめるように流れ、雪解け水と雨期の降水量増加による河川溢流によって毎年のように遺跡は水浸しになる。このような立地に大規模遺跡を営む理由は見つからない。しかしながら、モエンジョ・ダロの上流域にインダス東岸近くに位置するコート・ディジー遺跡の立地やコート・ディジー遺跡周辺からその上流のアトック一帯は石器石材となるチャートを豊富に含む強固な堆積岩台地であり、この付近での流路変更は困難であるとの理解が一般的である。他方、現在インダス川の東西に開削されている東西ナラ灌漑路の内、東ナラ灌漑水路をハークラー川の涸河床、すなわちナラ・ナディ川とする見解はムガールなどによってすでに示されている［Mughal 1970］。ただし、シンド・ナラ川がサッカルの西方を流下し、バローチスターン丘陵より東流してカッチー平野を流れるボーラン川やムラー川、さらにシンド・コヒスターンを流下しながらコラーチー川、ハブ川を合流させていたとする見解を支持する研究者は少ない。

他方、インダス中流域のパンジャーブ地方を中心として完新世期の地勢と河川流路を遺跡立地環境の側面から調査を続けているシュルデンラインらは、ハラッパー遺跡近郊の埋没河川であるビーズ（Beas）川の流域が中期完新世の 7000-6000BP に段丘化し始めるのとモンスーン帯が南下して次第に乾燥化するハークラー川の流量減少とが一致するとする。文明期の様相は不明瞭としながらも前段階の乾燥化が依然進行していたとする［Schuldenrein, Wright, Mughal, Khan 2004］。シ

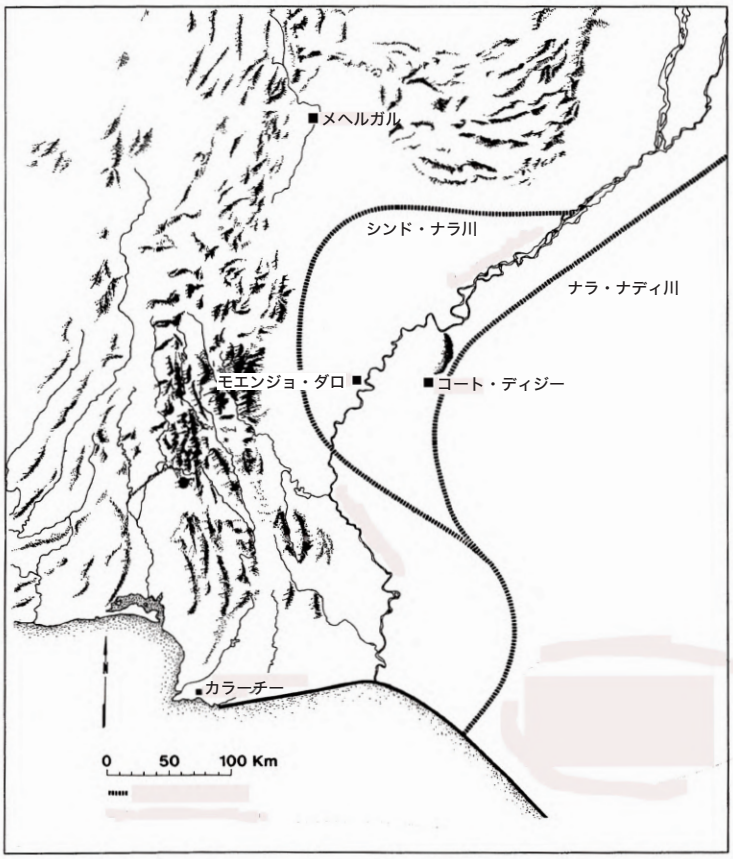

図 3　前期完新世インダス川推定復元流路［Flam1999］（一部改変）

ンドの下流域では、完新世以降、インダス河口域の進均作用（陸地からの岩屑物によって，海岸付近の海面が埋められ，海岸線が海へと前進すること）によって海岸線が南西方向に拡大し、海岸線の移動によるインダス川の流路変更が起きたとする。しかし、流路変更による段丘形成は 1 m以下であるため、その比定は難しいものの、モエンジョ・ダロから 25km ほど西方を流下していたとする［Schuldenrein, Wright and Khan 2007］。フラムのシンド・ナラのように数百 km キロまで西方ではない。

フラムの見解を受け入れるにはバローチスターン丘陵とインダス平原部での文明期以前の農耕村落の立地や農耕形態における両者の関係性をより具体的に捉える必要があろう。フラムが両地域での農耕形態の親縁性を示すとしたガバルバンドはバローチスターン丘陵でも南部のより降水量の少ない地域での農耕形態であり、よしんばシンド・コヒスターンをシンド・ナラが流れ、バローチスターンからの河川を合流させていたのならば、シンド・コヒスターンでの農耕は氾濫原農耕であったはずである。シンド・コヒスターンに立地した諸遺跡の生存基盤がガバルバンドによる農耕であるならば、シンド・コヒスターンにシンド・ナラ川がはたして流下していたのだろうか。加えて、シンド・ナラ川がシンド・コヒスターンからカッチ湿原へと流下するには、ライケスが示したアラビア海沿岸の隆起が文明期にすでに終わり、進均作用もかなり進行していたことを前提とすることになり、アラビア海沿岸の諸遺跡が数 10km も内陸に位置する理由を説明する必要も生まれてこよう。フラムの示すインダス川の流路は多くの課題を内包している。

また、地理学の側からは、フラムがインダス川の 2 流路を提示した同じシンポジウムでインダス川はほぼ現在と変わらない流路であり、ライケスのアラビア海沿岸部隆起が文明の衰退を招いたとする見解を支持する見解もある［Harvey and Schumm 1991］。

他方、農耕形態の考察では、完新世以後の気候研究も垣間見る必要があろう。古気候研究では湖底堆積土中の動植物遺体の酸素同位体や生物種分析や遺跡の立地分析などから行われている。西アジアで農耕開始期との関係で議論される 9.2 と 8.2 千年前イヴェントのモンスーンの後退と乾燥化、そして急激な寒冷化について、南アジアでは否定的見解が出されている［Flohr, Fleitmann, Matthews, Matthews and Black 2013］。

植物利用の分野でも［Bates, Petrie and Singh 2017］が前 6000 年頃にはガンジス中流のラフラデーワ（Lahradewa）で野生イネの最古の利用が開始されたとして、8.2ka の急激な寒冷化イベントを否定するような見解を示しているとともに、初期ハラッパー文化、盛期ハラッパー期、後ハラッパー期、さらに彩文灰色土器文化期の遺跡出土資料から、乾地性のイネの野生種から栽培種農耕への推移が伴出雑草からも推定できるとして、文明期前後の大きな気候変動についても否定的な考察がなされている。さらにユーラシア大陸全般の栽培植物と栽培行動を研究するフラーは、「前 7000-4000 にほとんどが非在地穀物による初期農耕がおそらく非在地の家畜、少なくともヤギを伴ってもたらされた。他の近東穀物の栽培もインダス地域にもたらされた」と述べるように、南アジアでの農耕開始期から文明以前まではベイツらと同様に気候変動に懐疑的であるが、前 3 千年紀末頃のイネや雑穀の利用に一定の気候変動を認めている［Fuller 2011］。

国内では、20 世紀末に行なわれた「環境と文明」科学研究費プロジェクトで前 3 千年紀から前 2 千年紀の文明の興亡に関して気候変動が様々に論じられたものの、西アジアから南アジア地域にかけて文明形成期に目立った環境の変化はなかったとされた［近藤 1994］。

このような農耕開始期から文明期の環境理解のもとで、南アジア、とくにその北西部の農耕については、メヘルガル遺跡の成果に注目が集る。メヘルガル遺跡の文化概要はすでに筆者が示しているため［宗臺 2000；Shudai 2016］、ここではフラーを始めとする研究者達の近年の理解をみておこう。

フラーは、近東で生じた農耕を第一次センターとして、それが南アジアへと拡散する過程で、各地で別個に栽培化され、おそらく南アジアを起源とするオオムギがあるとして、栽培化は単一地域からの単一のパッケージではなく、バローチスターンに至る経路に沿って混ぜ合わさった栽培種の組み合わせであるとする。さらにインド亜大陸北部が第一次センターとは異なるコブウシの増加、後期新石器から初期銅石器時代に用いられた綿、またいくらか後世にインダス平原で栽培化されたゴマや水牛の家畜化など新たな要素が加わった農耕形態としての第二次センターとして現れた、とする［Fuller 2011］。

パンジャーブ地域の遺跡出土植物遺存体分析から、盛期ハラッパー文化期までは雑穀の占有率は数%にすぎないとして、少なくともインダス文明期初頭まではメヘルガルと同様の栽培植物の組み合わせであったことが示されている［Bates, Petrie and Singh 2017］。ハラッパー文化衰退期に雑穀の増加がみられるのは、上述の中期完新世以降のゆっくりとした乾燥化とも関係した栽培植物の組み合わせ変更であり、小規模遺跡での生産規模に対応した雑穀栽培は文明後半期以降の労働力投下減少による生存戦略としてあらわれているという［Weber, Kashyap and Harriman 2010；Miller 2006］。 畠

作りから収穫、収納そして消費に至る一連の穀物農耕作業が行なわれる場所によって、出土する試料が異なることを前提として出土遺存体を分析すべしと主張するフラー［Fuller and Stevens 2009］に倣った分析結果として、ミラーはインダス文明の農耕を次のように述べている。天水→冠水（河床が流域より高いための溢流）→小規模灌漑（冠水の延長）→井戸汲み上げ灌漑という次第に労働力投下量が増加する農耕の水供給システムと地形および作物との関係を窺いながら、A：河川沿いの可耕地（重度の冠水）、B：河川から離れた可耕地（冠水、自然地形または人工的水路による冠水）、C：高地（草地、天水）、D：三日月湖や潟湖・湿地、の4つに分類し、灌漑水路を伴う大規模灌漑の可能性を除く。その上で、ウイットフォーゲルのような大規模灌漑と労働力投下、そして余剰生産物が国家を形成するとの見解とは大きく異なる見通しを示した。しばしば流路変更するパンジャーブやシンドでは、大規模灌漑システムは適さない。耕地の多くは個人や組織ではなく、拡大親族によって保有され、分配された。ただし、高度に労働力投下して意図的に水を導いた土地では、個人または家族グループで保有された地点もあっただろう。そうした土地保有体制は親族組織を基盤とした集団にコントロールされた富と権力という貧弱な階層性がインダス文明の大きな特徴として説明する［Miller 2006］。

多くの遺漏があろうと思われるが、以上でインダス流域の完新世以降の気候と環境に関する近年の研究状況を示し得たであろう。大規模な寒冷化や温暖化を伴う気候変動を新石器文化開始期以降に想定する必要はないものの、前4千年紀以降、次第にモンスーン帯が南下する乾燥化が徐々に始まり、それに伴う流量減少による河川の流路変更が想定される。しかし、フラーの見解のようにインダス下流域の大規模な流路変更を想定させるものではなく、耕地運営の正否が文明の行方を左右した。

本稿の課題

交易研究について（東西交易とバローチスターン丘陵）

交易路の複数化や交易路の移動・変更と文明形成との関係性に視点を置く研究は、コルテーシらの論考にその一端を見ることができた。それは、インダス文明形成論議の中で、メヘルガル遺跡などのバローチスターン丘陵の文化が、インダス平原とアフガニスタンやイラン高原の西方地域との間に位置しながらも、それはあくまでも仲介者であり、周辺の文化的環境変化に従って姿を変えた、と理解されてきた［Tosi 1979; Cortesi *et al.* 2008; Shaffer 1982; Ratnagar 1991］。しかし、イラン高原までを視野に入れてインダス文明の形成を考察しながらも、中間地に位置するというだけで、バローチスターン丘陵の文化を仲介者とする性格付けにとどまっている限りは、インダス文明の形成をインダス平原内でのみ理解する静的な捉え方とならざるを得ない。インダス文明形成期前後における交易路の変遷を文明形成の視点から見直す必要がある。今一度、1950年代から70年代に、文明の起源を求めて調査されたバローチスターン丘陵の文化を見定める研究に立ち戻って、バローチスターン丘陵の文化とその東西に広がる地域の文化的動静との関係を探らなければならないと筆者は考える。

需要物資と消費地、そして中継結節地点の変動による交易路の移動を含んだ交易形態の複雑化は、交易路上にある関係地域の政治状況に大きく影響される一方、ルートの確保・維持をめぐる関係地域社会間のせめぎ合いと融和が当該地域に常に沸き立っていたであろう。そのため、インダス平原の文化は、ハラッパー文化へと変化し、インダス文明を形成する過程で、西方に向けた陸上交易路上にあるバローチスターン丘陵の地域拠点遺跡群との間に何らかの葛藤が存在したことを想定できる[16]。こうした南西アジア交易形態の変遷と異同の視点から、南アジアでの古代文明形成論議が可能である。

シェイファーは、メソポタミアとインダス文明の資源調達法の差異がハラッパー文化に斉一性の高い物質文化をもたらし、さらにインダス文明はメソポタミアに見られる世襲的社会・経済エリートの出現による社会組織とは異なる文明社会を築いた、と指摘した［Shaffer 1982］が、今後はこのような西アジア研究からの借り物ではない、インダス文明形成研究のための新たなモデル作りが必要である。これに対して、小茄子川らの研究者が印章の製作とそこに刻まれた図像の解釈から新たな交易の形態を提唱している。

バローチスターンに都市の存在を認めうるか

インダス文明の形成に関する議論から示された課題は、何が平原部の文化に文明社会を築き上げさせたのか、そしてバローチスターン丘陵の新石器以降の文化は、平原部の文化とどのように関わり、また文明形成とどのように対峙したのか、である。これまでの南アジア先史研究では省みられてこなかったこの課題は、バローチスターン丘陵の農耕文化社会が都市社会を築き上げなかったのか、との課題にも発展する。すなわち、これまでに「地域拠点集落」と記してきたバローチスターンの社会を「都市」と捉えられるのであれば、インダス文明は、都市社会の成立とともに形成されたのではなく、都市社会間の競合から生じたものであったことになる。それは、新たな南アジア古代史の展開

を導くことにもつながる問題でもある。加えて、上杉らが彩文土器文様のモチーフの交換がバローチスターンとシンド地方の文化との間で起こり、双方の文化交渉が活発であったことを如実に示している。その背景として両地域間の文化交渉と交易が行なわれるにあたって、両者がどのような社会として向きあっていたのかが大きな課題となる。

さらには、何が地域間交渉の対象物であったのか、地域間交渉を行なう必要性は何か。それが域内で、また対外的にどのように体系化されていたのか。その視点を欠いては、当時の人々が浮き上がってこない。［Uesugi 2019、上杉 2020b］は、文明初期のインダス文明社会はバローチスターンに文化交渉範囲を広げ、さらに南イラン、湾岸へとその範囲を広げるが、そもそもの始まりにおけるバローチスターンの位置づけとそれを取り込むことの意味合いを把握する必要がある。

以上の課題に取り組むには、次の論点が必要になろう。

①バローチスターン丘陵に展開した先史文化を概観し、定住農耕社会の成立から文明期までの足取りを確認する。

②バローチスターン丘陵における文化集団の社会的凝集性を窺える証左を考古遺物に見いだせるか。

③交易と都市化の関係を単純な経済・社会の「開放体系」概念だけで捉えきれるのか。すなわち、「開放体系」の根幹である交換・交易の形態は、バローチスターン丘陵の社会とインダス文明社会とで異なるのではないか。

④バローチスターン丘陵の地域拠点集落、または都市はなぜインダス文明を前にして衰退し、一方でバローチスターンの土器文様などの精神世界の象徴をインダス文明、または平原部にあるシンド地方の社会は受け入れ導入したのか。

本稿では、まず上記①のバローチスターン丘陵とインダス平原および周辺地域の編年の措定を示し、それを踏まえてインダス文明と周辺地域との文化交渉を示唆する近年の印章研究を概観して文明形成期前後の時期における社会状況を垣間見る。その後、次号にて近年の日本人研究者の論考を振り返りながら上に提示した残りの3点の課題を検討する。そうした検討を経て、あらためてバローチスターン丘陵の諸文化を概観し、南アジアでの古代文明形成モデル提示を試みることとする。

以下では、近年の研究成果を取り入れて論を進めるが、本稿および次回の論述で用いる地名・遺跡名の表記にあたって、主な研究対象地であるパーキスターンについてはウルドゥー語の文字表記による原綴りに基づいて表記された［ダーニー ／小西・宗墓訳 1995］と、インドについてはヒンディー語の文字表記に基づく［ターパル／小西・小磯訳 1990］に基本的に従うが、一部、慣例的表記によっては長母音を除いたものもある。アフガニスタンの地名・遺跡名については、ダリ語による発音記号表記を持つアルファベットで示された［Organization for Surveying and Cartography GEOKART (ed.) 1984］に、他地域の固有名詞については［NHK 2000］および［大津･常木･西秋 1997］に従った。また、ペルシヤ語表記の一部については春田晴郎氏のご教示に従った。

編年の提示と印章研究

編年

バローチスターン丘陵の諸文化の概要は筆者がすでに示しており、ここでは私案の編年表を提示して文明形成前後の文化動態の議論に焦点を絞って論を進めよう。

新石器文化からインダス文明形成期にかけた南アジアとその周辺の編年案は、イランのシャハリ･ソフター遺跡とテペ・ヤヒヤ遺跡調査を手がけたトッシーによる西アジアから南アジアにかけての広範囲を見渡した成果を筆頭に、国内では筆者をはじめとして数多く提示されてきた。近年では、土器文様からバローチスターンとインダス平原の文化交渉を重視した上杉と小茄子川の示したものがある。上杉は、文明期における社会変化とともに、前3千年紀前半以降の文化交流関係を示す詳細な編年研究によって、「遺跡や小地域レベルでも多様な変化が生じている可能性が高く、編年の精度が向上すれば、刻々と社会が変化していく過程を描きだすことが可能になる」［上杉 2020：65］と述べるように、その重要性は今後の研究を左右するであろう。しかしながら、上杉が指摘するように層位的発掘調査とそれにもとづく遺物の取り上げが望めない現在、小茄子川や宗墓の示す現状での資料分析と論理的組み上げによる文明・都市出現過程の追求によるしかない。

筆者はバローチスターン丘陵における新石器文化からインダス文明初期併行または直前のメヘルガル遺跡Ⅶ期までの編年を示し［宗墓 1997］、その後に新石器文化開始期の訂正と新たな年代比定を示した［宗墓 2016; 禿 2010, 2011］。それと並行して上杉と小茄子川らは、文明形成期から文明期の展開と時期区分を主な目的として、彩文土器文様と印章の形態・文様を視点として編年を試み、改訂を続けている。本稿にかかわ

表１　インダス文明以前の関連遺跡編年表（網かけは初期農耕文化および文明直前の地方文化）［宗基 1997］を改変

年代（紀元前）	時代区分	文化名：バローチスターン時期区分	文化名：地域	クッリ文化：フズダール	アムリー文化：ダードゥー	クエッタ文化：カラート：アンジーラ	クエッタ文化：カラート：シアー・ダンブ	クエッタ文化：クエッタ：キリ・グル・ムハンマド	クエッタ文化：クエッタ：ダンブ・サダート	クエッタ文化：ジョーブ・ローラーラーイー：ラーナー・グンダイ	クエッタ文化：ジョーブ・ローラーラーイー：ペリアーノ・グンダイ	クエッタ文化：カッチー：メヘルガル	クエッタ文化：カッチー：ナウシャロー	ゴーマル文化：バローチスターン北東部	ゴーマル文化：ゴーマル：グムラー	ゴーマル文化：ゴーマル：ラフマーン・デーリ	ゴーマル文化：パンジャーブ北西部：サラーイコラー	南アジア北西部区分：時期	コート・ディジー文化：パンジャーブ類型：カーリーバンガン	コート・ディジー文化：シンド類型：コート・ディジー	ヘルマンド（南東イラン）：シャハリ・ソフター	南部アフガニスタン（カンダハル）：ムンディガク	南トルクメニア：ナマーズガー
			遺跡／社会	ナール	アムリー																		
2300	青銅器時代	インダス文明期	領域国家	Ⅳ	Ⅲ	クッリ文化の北部への展開							Ⅲ		Ⅳ			インダス文明期	Ⅱ	第3層以降	Ⅲ	Ⅳ3	Ⅳ
				Ⅲ クッリ文化からの移行期	Ⅱb								Ⅱ			Ⅲ B						Ⅳ2	
2600	銅石器時代	クエッタ文化期	初期都市	Ⅱ	Ⅱa	Ⅴ	Ⅲ		Ⅲ	Ⅲc	Ⅰ（上層）	Ⅶc	Ⅰ D	ゴーマル文化期	Ⅲ	Ⅲ A	Ⅱ	初期ハラッパー文化期	Ⅰ	コート・ディジー文化	Ⅱ	Ⅳ1	Ⅲ
					Ⅰd							Ⅶa・b	Ⅰ C										
					Ⅰc	Ⅳ			Ⅱ	Ⅲb		Ⅳ	Ⅰ B			Ⅱ					Ⅰ	Ⅲ	
3000		ケチ・ベーグ期	農耕集落の拡散		Ⅰb	Ⅲ	Ⅱ iii		Ⅰ	Ⅲa		Ⅴ	Ⅰ A	トーチ・ゴーマル期	Ⅱ	Ⅰ						Ⅱ	
				Ⅰ			Ⅱ ii	Ⅳ				Ⅳ						ハークラー（ラーフィー）土器文化期	ジャリールプール			Ⅰ	
					Ⅰa		Ⅱ i																Ⅱ
4000	土器新石器時代	ＫＧＭ期	農耕集落の確立			Ⅱ	Ⅰ	Ⅲ		Ⅱ		Ⅲ		シェーリ・ハーン・タラカイ期	?		Ⅰ		Ⅰ				Ⅰ
										Ⅰb													
						Ⅰ		Ⅱ				Ⅱ			初期農耕文化の平原部への拡散								
5000	無土器新石器時代	メヘルガルⅠ期	初期農耕村落					Ⅰ Ⅰ下層		Ⅰa		Ⅰc Ⅰb Ⅰa			Ⅰ								

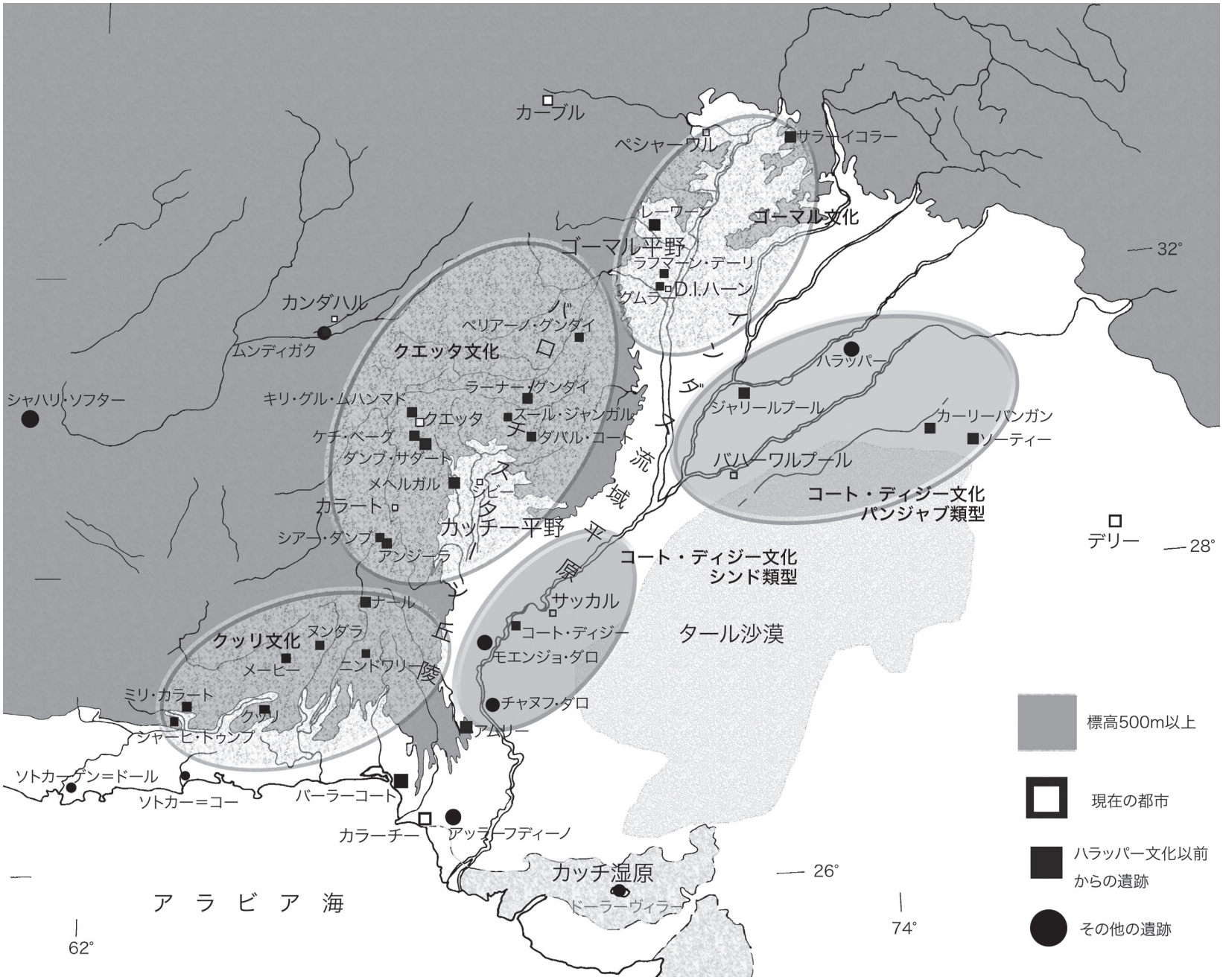

図4　コート・ディジー文化併行期の土器文化

る文明形成期前後の編年作業では、［宗臺 1998］で行なったいわゆるコート・ディジー式土器の検討から新たにゴーマル文化を設定してコート・ディジー式土器から分離し、残ったコート・ディジー式土器文化をさらにシンド類型とパンジャーブ類型の 2 文化圏に細分し、それらとは異なるバローチスターン丘陵のクエッタ式土器文化の併存を指摘し、加えてバローチスターン南部にクッリ文化の存在を指定した[17]。とくに、平原部のコート・ディジー式土器文化に特徴的な鍔付き壺がクエッタ式土器群にはないとして、文明直前の平原部とバローチスターン丘陵の諸文化の異質性を示した[18]。これに対して、上杉は筆者の見落としを指摘して、クエッタ式土器文化にも鍔付き壺の存在を示し、同時に同様の土器形式がイランのシャハリ・ソフターにまで拡がる当該期の文化交流と時代性を示すものとした［上杉 2008；上杉・小茄子川 2008］。確かに筆者の見落としであったが、バローチスターンでの当該土器形式はメヘルガル遺跡最末期のⅦc 期出土の細片である。メヘルガル遺跡調査の第一次概要報告で指摘されているように、メヘルガル遺跡の遺丘表面からはハラッパー式土器が採集されている。採集された土器片の提示は行なわれていないため、判然とはしないのだが、遺跡の最末期はインダス文明、ハラッパー文化初期段階の直前、またはそれと並行していた可能性がある。このあたりの詳細な編年が今後の大きな課題であろうと思われるが、現段階では平原部のコート・ディジー式土器文化がメヘルガルⅥ期後半併行期以降から鍔付き壺を内包していた状況とは大きく異なる。バローチスターンのクエッタ式土器文化は長らく平原部の土器形式を受け入れずにコート・ディジー式土器文化と併存し、文明直前になってはじめて受け入れたことを示している。そこには、後述する彩文土器文様に窺われるバローチスターンと平原部シンド地方との文化交渉とは異質な側面を見せている。

彩文土器文様に見られるバローチスターンとシンド地方コート・ディジー文化との文化交渉は、上杉と小茄子川らが岡山市立オリエント美術館、古代オリエント博物館、それに愛知県陶磁美術館所蔵のメヘルガル遺跡出土とされる土器群の調査を大きなきっかけとして示されてきた［Uesugi 2012、2013；近藤・上杉・小茄子川 2007；小茄子川 2008a；Shudai *et al.* 2009、2010、2011、2012、2013、2015］。

これらのバローチスターン出土とされる土器の詳細な調査とともに従来から行われてきたハラッパー式土器の分析にデザインシステムの概念を導入して、バローチスターンの土器文様がどのようにシンド地方の土器に、そして印章の図像に移入されたかを探ることで、文明形成の要因に交易を軸とした文化交渉の存在を見すえながらハラッパー文化の醸成を見る。こうした文化交渉の時期を小茄子川は移行期と規定しているが、こうした動向の把握には編年が基本となる。

この時期の編年作業にあたって注目されるのが、メヘルガル遺跡とその近傍に位置するナウシャローの時期分別とその土器群の比較である。ナウシャロー遺跡はⅠ期からⅢ期に分岐され、そのⅡ・Ⅲ期がハラッパー文化期、Ⅰ期がクエッタ式土器のバローチスターンの文化を基本としながら南バローチスターンのクッリ式土器やハラパー式土器への移行を示す土器によってＡ～Ｄの文化相に再分期される。［Jarrige 1986、1989］。ナウシャロー遺跡出土土器の定量分析を行なったキヴロンは、ＩＣ期がメヘルガル遺跡Ⅶc 併行、ＩＤ期がクッリ式土器とハラッパー式土器からなり、ＩＣ期段階ですでに「原ハラッパー式土器」の傾向がみられるとする［Quivron 1994］。また魚鱗文、交差円文、ピーパル文などのハラッパー式土器に用いられた文様が文明以前からすでにバローチスターンからシンド地方に存在し、ＩＤ期以降になるとアンテロープ、太陽文に櫛形文がさらに現れて、器型は異なるもののハラッパー式土器文様として引き継がれるとして、ハラッパー式図像が前代の地方的文様要素を選びだしていることを示す一方で、ナウシャローⅡ期にはクエッタ＝サダートⅢ/メヘルガルⅦC 期の伝統は消失して、ウシ、樹木や鳥のクッリ式に関連した ID 期の甕も見られないとする。そして、こうした文様の推移は、チャヌフ・ダロなどのシンド地域でインダス図像様式の概念が形成されたことの傍証であり、ここから他の地域に拡がったとする［Quivron 2000］[19]。

［上杉・小茄子川 2008、小茄子川 2008b］は、こうしたキヴロンのナウシャロー遺跡で得られた文様要素ごとの推移と継承を前提に文様要素をデザインシステムの要素として組み換えることで、ＩＣ期を移行期、ＩＤ期を過渡期とする［小茄子川 2008b］。しかしながら、いわゆるコート・ディジー式土器とハラッパー式土器を比較する際に、クエッタ式土器の一つであるファイズ・ムハンマド式土器をコート・ディジー式土器様式でないとする一方、筆者がコート・ディジー式土器から分離したゴーマル地方の土器をコート・ディジー式土器とするなど、器型と器形・器種の理解にやや混乱をきたしている。いずれにしても、小茄子川はハラッパー式土器とファイズ・ムハンマド式土器（筆者のクエッタ式土器）間の彩文要素の共通性を移行期におけるカッチー平野とシンド地方の交流関係の強化にその理由を求めるが、彩文文様に引き継がれない文様がインダス式印章に用いられるとする。また、彩文文様と印章の図像に共通する文様要素の継承を次のように述べている。「単純に前代の土器様式から型式学

的に連続するものでもない。すでに存在した諸要素を組み合わせたり、分解・再構造化して創出された新たな彩文様式だといえる。（中略）移行期にみられた地域間交流が一段と進み、特定の地域的文化要素の取捨選択と再編というプロセスを経て、統一された彩文構成をもつハラッパー式土器が成立したと考えられる」［小茄子川 2008b：60-61］。ここに見る型式学的に連続しないとする考え方は、文明が文化を創造すると解釈しえよう。前代の諸要素を分解し、再構造化する前提として、文明としての社会・政治文化と精神文化が物質文化に何を求めたかということである。物質文化から社会・政治文化、精神文化を復元し、総体としての文化を構築する考古学論理の逆転であり、それを可能とせしめるためにはなぜそうした取捨選択を行なわざるをえなかったのかを示す必要があろう。上杉がこのあたりの事をそれ程単純なものではないと指摘するように［上杉 2020］、ハラッパー式土器の器型はあくまでもコート・ディジー式土器を基盤としてインダス平原のシンド地方の生活文化を素地に展開したものである。また、社会・政治文化が主導的位置を占めることをジェイコブスが指摘するように［ジェイコブス 2016］、文明が文化を創造すると解釈した時、政治的要因から精神世界を示す文様の選択を行なっているのであり、その主体となったシンド地方のコート・ディジー文化が文明形成に向けてどのような政体であったかを語る必要があろう。こうした視点をもって、次に印章を見ていくこととする。

印章と交易

イラン高原からインダス流域に出土する印章は、メソポタミア地域で見られる円筒形の転がすタイプではなく、矩形の印面を押圧するスタンプ型である。この矩形スタンプ印章の一つとして背面に饅頭様の鈕をもち、印面に具象文を、ときにインダス文字を刻むものがインダス式印章である。しかし、インダス式印章が現れる以前にスタンプ式の印章が当該地域に現れ、その種類と使用空間と時間軸上の展開を上杉が次のように述べ、地図上に的確に示している［上杉 2010：Uesugi 2019］。それは、前 4 千年紀後半のバローチスターン高原東縁部に出土する幾何学文印章の文様が前 4 千年紀のイラン高原で出土するものと酷似し、前 3 千年紀前葉の段階には同心円を文様に組み込んだインダス地域独自と考えられる印章がパンジャーブ地方、ガッガル地方、バローチスターン地方北東部に分布するようになると指摘する。上杉の言う幾何学文印章がかつて区画文印章と訳されていたボタン型の compartmented seals で、カスパースが中央アジアのバ

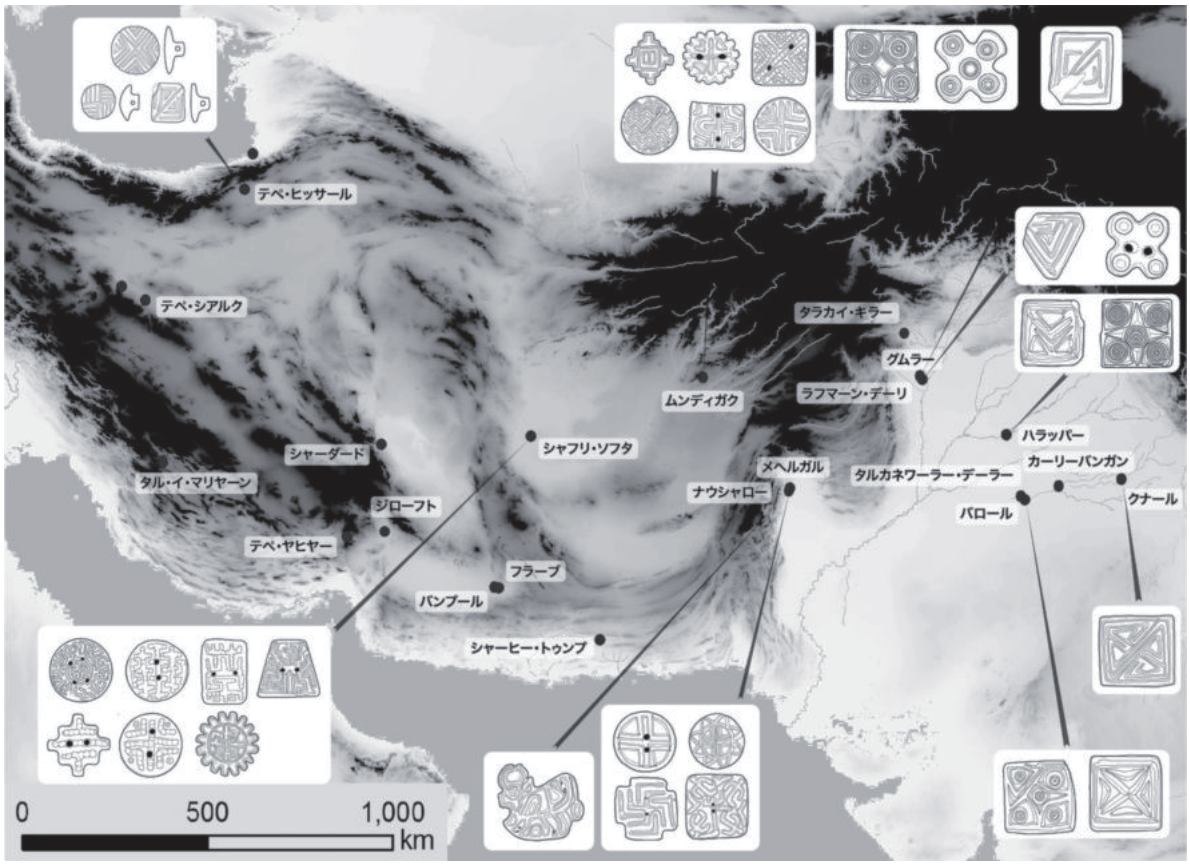

図 5　西南アジアにおける区画文印章出土地点［上杉 2010］

クトリア地域に起源を求め、関連遺物の出土からイラン、インダス地域そして湾岸地域にまでその分布が拡がる文化交渉の証跡として取り上げてきたものである［During-Caspers 1985、1997、2008］。

上杉は、かつての区画文印章の時間軸と空間軸を明瞭に示し、とくにインダス文明以前において広範な地域に類例が分布する様子をインダスのコート・ディジー文化期に拡がった鍔付広口短頸壺の展開と重ね合わせて、インダス文明形成直前の時期に広範な文化交渉が存在したことを示そうとしている。そして、土器に観察できたように印章もインダス文明期にインダス式印章として新たな型式が現れることを指摘する。小茄子川はこの文明期の展開を上述の論理による「伝統の創出」とする。

インダス式印章の具象文については、文明発見当初から動物や人物像を主体とすることが認識され、そこから当時の気候や植生を推察する［Dave 1966］他に、精神世界を探る見解［Hazra 1969；During-Caspers 1993；Possehl (ed.) 2008； 米 山；2006、2008； 山 下 2008］、印章の意味として集団の表徴であろうとの見解［Aruz 2018］とともに集団間の取引に用いた結果として交易関係を示す資料であると考えられてきた［Gadd 1932］。インダス式印章は上杉によれば、墓に副葬されることがないために個人に帰属するものではなく、一族や集団の中で世代を超えて伝世していた可能性が高く、廃棄時期も特定できない現状では、インダス式印章を時間軸状で理解することがほぼ不可能である、という［上杉 2020：69］。そして、インダス式印章が個人に帰属する器物でないとすれば、何らかの関係によって結ばれる集団によって、あるいは集団間の関係によって決定された可能性が浮上するとされる。さらに、ペルシャ湾岸地域で出土する饅頭型の鈕と円形の印面にインダス式印章と類似した図像を彫る湾岸式印章に確認できるインダス文字と短角ウシは、インダス式印象との強い関係を示し、湾岸式印章がアラビア半島方面との交流に関わるインダス系集団のシ

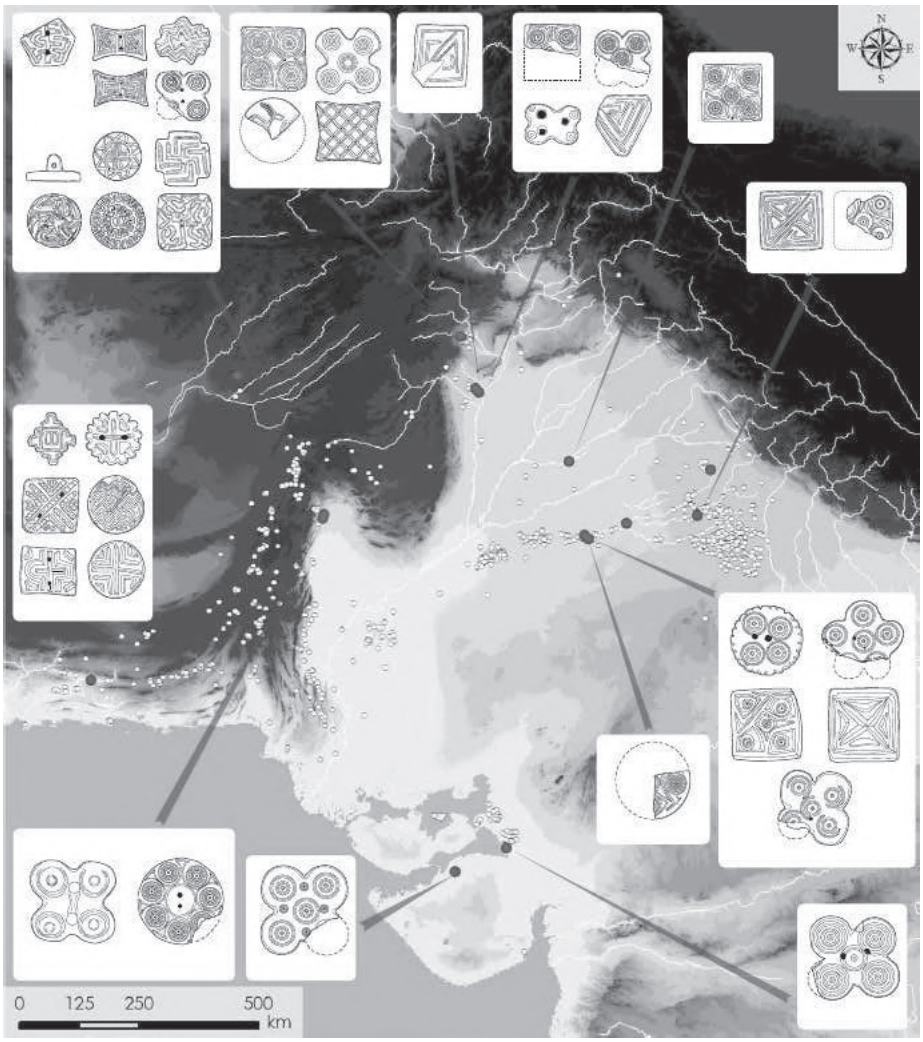

図 6　インダス平原とその周囲での区画文印章出土地点［上杉 2010］

ンボルであった可能性を指摘できると、非常に興味深い考察を行なっている［同書：70］。しかしながら、世代を超えて保持される印章が集団で保持されたとする意味が明瞭ではない。集団の長が代々保持することを示しているのだろうか。他方、ギルドのような同業者集団の成員であることの表示物として、集団成員が代々保持した可能性もあろう。

さて、こうした出土地点と時間軸にみる地域間交流圏の認定とそれに関わった人々とその動向を窺える資料として、印章の研究は当時の社会形態をも考察の射程に入れることが可能である。その端緒ともいえる研究が国内と欧米で始まっている［上杉 2012；小茄子川 2007、2012；小茄子川・中山 2012］。これらの研究は、印面に彫り込まれた図像とその彫刻技術を顕微鏡や走査電子顕微鏡を用いて詳細に比較検討している[20]。

製作手順や工具の差などからグリーンはモエンジョ・ダロ遺跡出土の 5 点を分析して 3 人の工人を比定する［Green 2016］。フレネツらは製作行程の厳格な製作基準が設けられていたとして、印章は法的に権威付けられたもので、おそらくは官僚制的上下関係を表示する役割もあったとする。属人的に用いられた円筒印章と比べて、インダス式印章はより公的機会に用いられる公的人格を表示するものであろうと述べる［Frenez 2018、Frenez, *et al.* 2016］。フレネツとトッシーはこうした分析の前提として、ロータル遺跡での印章の出土地点を分類し、25 ～ 30 の異なる印影があり、それとほぼ同数の人間が交易品の物資管理にかかわっていたとする［Frenez and Tosi 2005］[21]。印章製作技法研究総括のようにして、ジェイミソンは一角獣の各部位の比率を数値化して比較し、製作工人・工房による製作上の図像理解と技術にもとづく差異をモデル化して、タイプ分けを行なう。インダス式印章の製作技術におけるタイプは政治社会的グループを反映しているはずであり、異なる工人集団または工房群がインダス文明圏に存在し、印章の製作は集約的ではなかったものの、その工房はおそらく都市統治者の管理下にあっただろうとする。また、製作技術、とくに彫刻技術はインダス文化圏にわたって、通時的に変化したという［Jamison 2018］。

こうした製作技術・技法に表されたインダス文明社会が人々の印章に込めた認識の復元は、文明の社会構造に迫ろうとする動向であるが、その背景には印章の基本的機能である押印によって物品または書類内容の保証と帰属の表示があり、それが個人であろうが集団であろうが変わらないとする認識が存在する。それゆえに上杉が示した文明期以前の幾何学文印章の分布が広域に及ぶ文化交渉の存在を示すとする論拠でもあり、湾岸地域との関係を示す湾岸式印章にみられるインダス流域やクッリ文化と湾岸地域との文化交渉・交易を示唆するものとなっている［小西 1990；小西・後藤 1988；後藤 1997、Oljidam and David-cuny 2018；Uesugi 2019］。

湾岸地域との関係については次回に譲るとして、ここではインダス式印章に彫り込まれた図像に関する近年の論考をみておく。インダス式印章の図像に関しては、国内研究者による成果が目覚ましい。鈕型式分類に基づく編年や印面の法量や型式による分類［小磯・小茄子川 2009］、そして印面に彫り込まれた図像の分類と系譜の検討［小茄子川歩 2007、2011］である。とくに図像の系譜については彩文土器文様の検討時に措定されたバローチスターン丘陵のクエッタからカッチー平野に展開したクエッタ文化、論者によってはファイズ・ムハンマド式土器文化とされるが、そうした西方丘陵地帯に現れた図像の選択と借用が指摘されている［小茄子川 2013、2016］。

バローチスターン丘陵の先史文化では彩文土器の文様に動植物文を配置するものが多い。とくにクエッタ文化におけるファイズ・ムハンマド式土器に描かれた動物の連続文、そして直後のクッリ式土器における動物と植物文の組み合わせがハラッパー式土器にも影響を与えるが、その文様の内、ウシはハラッパー式土器には描かれずにインダス文明では印章にのみ用いられることになる。バローチスターンでは一部を除いてすべて右向きに描かれていたが、文明域内で作成されたインダス式印章に刻まれたウシには、押印後の左向きと右向きの 2 種類がある。その右向きのウシはやはりクッリ式土器に描かれたウシと植物のセット関係を踏襲したという。小茄子川は、こうした現象を土器彩文のデザインシステムと同様に先行文化の文様要素を土器と印章とで選択して受け継いで再構造化したとするが、さきに指摘したように、それはあくまでも選択した側の論理のみでの視点であろうし、左向きのウシを含む動物像がガッガル地域などに地方型として存在する。いずれにしても、シンド地方とバローチスターン間でなされた文明形成に向けた文化交渉の姿と、文明形成後における文明域内での展開の地域差の一側面を示している[22]。

また、この動物と樹木の組み合わせは、湾岸式印章につづくと思われる前 2 千年紀前葉のディルムン式印章にもみられる。バローチスターン地方 、さらには右向きインダス式印章と通じる要素の存在は、対外文化交渉の証であり、印章にはその物品管理機能以外にも社会集団、さらには社会組織、文明そのものを物語る要素が秘められている。

以上の文化・社会変遷をもとに、次号では先に掲げた 3 点の課題について考えたい。

なお、本稿の脱稿直前に *South Asian Archaeology and Art 2014* と *2016* を入手した。新型コロナウィルスが爆発的に感染拡大したインド、ニュー・デリーにて刊行の上記図書の手配がままならず、本稿に反映できなかった。次回の続編に反映させていただくこととしたい。

註

1) 現在、大量の降雨時にのみ流下するガッガル＝ハークラー涸河床は、ヴェーダ文献、仏教文献、ヒンドゥー文献などに見られるサラスヴァティー川であった、と考えられている［Stein 1942; Bhan 1970］。ガッガル＝ハークラー涸河床は、衛星写真に確認できるように、サッカルとムルターン（Multan）の中ほどに位置するバハーワルプール（Bahawalpur）近郊で、インダス本流と合流していたとされる一方、現在のインダス本流の東を流れる東ナラ（Nara）川（灌漑水路）とほぼ同じ流路を下りながら、河口はより東方のカッチ（Kutch）湿原に流れ込んでいた、とする見解もある［Meadows and Meadows (eds.) 1999］。

2) 以上の 18 世紀から 19 世紀までの南アジアにおける考古学調査の概要は、［Chakrabarti 1988; Roy 1953］から知ることができる。なお、必読文献を集めた Allchin and Chakrabarti 編集による論文集 A Source-book of Indian Archaeology シリーズの Vol. Ⅰ（1978）とⅢ（2003）は、学史研究にとって便利な書である。また、1063 頁にもおよぶ大著である［Possehl 1999a］は、南アジア近代考古学の創始からインダス文明発見の経緯を記したものとして良書となっている。邦語文献では、南アジア考古学研究史を 19 世紀以前から説き起こしている例は少なく、［曽野・西川 1970; 樋口 1979; 近藤・上杉 1999］を挙げられるのみである。

3) オアシス論は、トルクメニア丘陵のアナウ（Anau）遺跡調査成果と C.E.P. ブルックス（Brooks）の Evolution of Climate の影響を受けて、最終氷河期の終焉と共に、西アジアが湿潤冷涼な気候から乾燥高温気候に推移する途上、動植物と人間が水場に集まって、両者の共生関係から農耕・牧畜が始まった、とする考え方である。他方、ザグロス丘陵のジャルモ遺跡を調査したブレイドウッドは、当該地域に後氷期の気候変動を認めず、ザグロスからタウロス（Taurus）山脈にかけてのカシ＝ピスタチオ疎林帯に、後に家畜・栽培化される動植物が生息していたのであり、そうした核となる地域に農耕・牧畜が始まったとする核地帯論を提出した［Braidwood and Howe 1960］。第二次世界大戦を前後する時期に提出された新石器社会の成立を論じた２つの仮説は、ともに丘陵地域で動植物が人間によって農耕と牧畜という同一ベクトルにむけて馴化されたと想定し、大河川が流れ、都市文明が生まれたメソポタミア地域から離れた丘陵地域に、文明形成の足がかりとしての集住社会が開始された、とみている。「治水文明論」を説く K.A. von ウィットフォーゲル（Wittfogel）の論理も以上の仮説を暗黙の前提としている［中島 1977］。しかし、1980 年代後半には、メソポタミア西方のレヴァント（Levant）高原地帯の調査事例から、同一集団が農耕と牧畜をほぼ同時期に始めることはなく、集約的採集を行なう集団の定住後、まず農耕が開始され、動物の家畜化と農耕は一体ではなかった、とされた。西アジアにおける新石器文化研究については、［常木・松本（編）1995; 常木（編）1999; 藤井 2001］を参照されたい。

4) しかし、その一方で、S. ピゴット（Piggott）は、インダス文明に先立つ新石器文化が内発的に南アジアで発生せず、北部イランのテペ・ヒサルやトクルメニアのアナウの文化が、東部イラン経由でインド亜大陸西部に食糧生産技術をもたらした、と考えていた［Piggott 1950］。すなわち、インダス文明は外部からもたらされた集住社会を基盤とする文明である、との意見である。

5) G.L. ポセール（Possehl）は、このクッリ文化をインダス文明の地方的変異であるクッリ・ハラッパー文化（Kulli Harappan）と捉えた時期もある［Possehl 1992］。

6) ハークラー式土器文化期の設定は、［Mughal 1981］による。ジャリールプールⅠ期後半に、黒色と赤色を用いた 2 色彩文土器が現れ、ソーティー式土器成立へ向けた動きが始まる。

7) インダス平原部での文化展開については、ガッガル＝ハークラー涸河床沿いのチョーリスターン（Cholisthan）地域に、ハークラー式土器文化期からコート・ディジー文化、そしてハラッパー文化と後期ハラッパー文化の遺跡が数多く発見され、それぞれに文化的連続性があるのではないかと注目されているが、タール沙漠のただ中に位置するそれら諸遺跡の調査は進展を見せていない［Mughal 1990］。

8) 同書において、サンカリアは、「初期ハラッパー文化」を「先ハラッパー文化」と記している。

9) 1974 年から 85 年までの 11 年にわたって発掘調査されたメヘルガル遺跡は、報告者によって前 7000 年頃とされる最下層のⅠa 期において、二条裸オオムギ（*Hordeum distichum*）、六条オオムギ（*H. vugare* および *H. vulgare* var. *nudum*）、一粒コムギ・アインコルンコムギ（*Triticum monococcum*）、二粒コムギ・エンメルコムギ（*T. cicoccum*）、パンコムギ（*T. durum* または *T. aestiva*）の麦類と、小さな石器をいくつもはめ込んで作られた石鎌や麦を擂り潰すための磨石が出土していると報告される。最下層の年代については後述する。

10) S.P. グプタ（Gupta）は、南アジアの食糧生産経済が北アフガニスタンに発見されている旧石器文化終末期のアーク・クプルク（Aq Kupruk）とメヘルガル遺跡が核地帯となって生起し、ムンディガク遺跡はこれら核地帯からの影響を受けて、南アフガニスタンに現れた土器新石器文化遺跡とする［Gupta 1979a］。さらにカザルは、銅石器時代のダンブ・サダートのⅡ期以降をはじめとして、メヘルガル遺跡やアムリー遺跡に見られる基壇構築物や周壁の建設、また煉瓦の規格化や集落プランの継続的維持などに強力な統治機構の存在を認める。丘陵域内盆地とインダス平原に面した丘陵麓に位置するこれらの諸遺跡は、地域拠点集落であり、こうした拠点集落をバローチスターンに生み出した社会変動は、アフガニスタンのムンディガクⅢ期からⅣ 1 期にか

けて現れた周壁と寺院（temple）を構築した社会からの影響としている［Casal 1961］。

11）ハリヤーナー（Haryana）州チャウタング（Chautang）川左岸に位置するシスワル遺跡下層（シスワルＡ）もカーリーバンガンの下層と併行する。これらパンジャーブからラージャスターン地方の遺跡から出土するソーティー式土器は、時に白色彩文を用いるため、黒色彩文を基本とするコート・ディジー文化の地方的変異と考えられている。

12）周壁の外に耕作地を示す畝溝が発見されているため、住民は周壁内に集住しながらも、直接農耕に従事していた、と考えられている［Lal 1979］。

13）区画文印章と多くの類似点を持つ格子文・同心円文・十字文スタンプ印章は、インダス平原の遺跡から数多く出土するものであり、インダス文明がその発祥地である、とコルテーシらは考えている［Cortesi *et al.* 2008: 18-22］。区画文印章の印面の形状は矩形、三角形や円形を呈し、文様はいずれもナマーズガー遺跡Ⅱ～Ⅲ期の土器文様と類似した階段状の十字文、斜行市松文、食い違い文などの幾何学文である。前 3 千年紀後半、トルクメニアに興隆したバクトリア・マルギアナ文化複合（Bactrian-Margiana Archaeological Complex=BMAC）において動物などの具象文が加えられ、その文様はインダス文明の印章や護符の文様にも影響を与えた、とされる［During-Caspers 1997］。これらの印章を後述のように上杉は分類・体系化している。

バクトリア＝マルギアナ文化複合とは、ジェイトゥーン（Djeitun）遺跡で、新石器文化が興隆した南トルクメニアに位置するアルティン・デペ遺跡などが、前 3 千年紀中頃に相当するナマーズガーⅣ期以降に衰退し、次第に集落が東へと移動して、エラムの影響を受けて勃興するナマーズガーⅤ期からのアナウ文化を称して近年用いられている用語である。また、総称名として、オクサス（Oxus）文明とも呼ばれる。詳しくは Antiquity Vol. 68, No. 259（1994）での特集、“Special section, The Oxus Civilization: the Bronze Age of Central Asia 1”, pp. 353-427 を参照のこと。

14）［Renfrew 1975］が想定する各種交換モードの一つ。仲介者交易（freelance or middleman trading）には、2 つの形態があり、一つはそれぞれの地の管理下にない仲介者がある地で交換品を預かり、目的地に赴いて交換・交易を行なう形態である。もう一つは仲介地を設けて、そこで各地の物資の交換・交易を仲介する。後者の場合は、仲介地が中心地・センター機能を担う。使者交易（emissary trading）は、物資を持たせた使者を目的地に派遣して行なう交換・交易形態で、使者を派遣する側になんらかの分配システムがある、とされる。なお、レンフルーの交換形態については［常木 1991］が手際よくまとめている。

15）現在のバハレーン周辺にあったとされるディルムン（Dilmun）は、シュメール（Sumer）伝説の中で、エンキ（Enki）にまつわる楽園とされる［杉 1978：15-19］。さらに、ディルムンについて、ラガシュのウル＝ナンシェ（Ur-Nanshe）の碑文はディルムンの船が貢ぎ物を運んできたと記し、アッカド（Akkad）のサルゴン（Sargon）王の石彫の玉座に刻まれた碑文はディルムン、マガン（Magan）、メルッハ（Meluhha）からの船がアガデ（Agade ＝ Akkad）の港に係留されている、と記している［クレンゲル 1983; 後藤 1999b］。ビビーは、水と深く関わるエンキとの関連で、湾岸地域で唯一飲料水が容易に得られるバハレーンをディルムンと想定した。ディルムン、マガン、メルッハに対応する地域は、様々に想定されているが、［Ratnagar 2004］はディルムンをバハレーンを中心とするカタール（Qatar）からファイラカ島辺りのアラビア湾岸北西部に、マガンをオマーン（Oman）半島からイランのケルマーン辺りまでに、メルッハをマクラーン海岸からインダス川流域に比定している。文献史料によれば、木材や黒檀がメルッハからメソポタミア地域への搬入品とされ、サルゴン王碑文に窺われるように、その往来は頻繁であった［クレンゲル 1983］。

16）こうした考え方は、桑山によってすでに示されている。桑山は、インダス文明の交易と社会変化要因の一つとして、インダス文明の交易形態が文明理解の重要な視点である、と指摘し、先史から古代の南アジア社会における直接交易と間接交易、そして中心地再分配交易がどのように行なわれたのかを検討する必要性を論じている［桑山 1975］。

17）［宗墓 1998］では、ゴーマル文化につづいてグムラー遺跡にハラッパー文化がみられるとしたが、グムラー遺跡の土器説明にて指摘しておいたように、ゴーマル式土器を残しながらの地方型ハラッパー文化であることを土器資料の再調査を行なった近藤らが示している［Kondo *et al.* 2006］。

18）［Mughal 1970］が指摘したように鍔付き壺をコート・ディジー文化などの文明形成期直前に平原部に現れる土器型式上の特徴であると［宗墓 1998］が指摘した際に、前代からつづく広口短頸壺に鍔を付けたものとの型式認定をして、型式学的連続性を重要視した。上杉と小茄子川はこの型式連続性よりも当該期の特徴であるとして鍔付広口短頸壺の名称を用いている。なお、小茄子川は別型式の特徴である端反口縁と広口短頸壺の口縁部型式に混乱が見られる［小茄子川 2008a・b］。

19）表 1 の編年表に示したクッリ文化の年代については次回にて記述する。

20）従来は石器や土器の表面観察のために用いられたレプリカ・セム（replica for Scanning Electric Microscope）法が、近年では土器片表面に残された植物遺存体の痕跡から種を同定するために用いられている。土器片に植物遺体の痕跡として残された窪みにシリコン樹脂を注入して、窪みの型取りを行なう。この型取りされたシリコン樹脂を電子顕微鏡で観察して植物種の同定を行う。

21）象の印影が、16 例も用いられる。象の図像がある印章保持者は特別な役割を有し、概してロータルの倉庫管理に官僚的機構の頂点とは言えないまでも階層的行政組織の存在を想定させる一方、象の印章のように何か特定の機能を示す資料例は他にないとする。

22）土器文様の動物図像の右向き・左向きの記述と印章の印面上の右向き・左向きの表記が時に論理の混乱を起している記述が見られる。印面上の右向き・左向きは押印時に左右

逆転することを意識した記述が望まれる。

引用・参考文献

Abraham, S.A., P. Gullapalli, T.P. Raczek and U.Z. Rizvi (eds.) 2013 *Connections and Complexity: New Approaches to the Archaeology of South Asia.* Walnut Creek, California: Left Coast Press.

Agrawal, D.P. and S. Kusumgar 1979 "Radiocarbon Chronology of Indian Protohistoric Cultures", in Agrawal and Chakrabarti (eds.) 1979: 371-386.

Agrawal, D.P. and D.K. Chakrabarti (eds.) 1979 *Essays in Indian Protohistory.* Delhi: B.R. Publishing Co.

Allchin, B. (ed.) 1984 *South Asian Archaeology 1981.* Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Allchin, B. and F.R. Allchin 1968 *The Birth of Indian Civilization - India and Pakistan before 500B.C.* Middlesex: Penguin Books (No. A950).

Allchin, F.R. and B. Allchin (eds.) 1997 *South Asian Archaeology 1995.* Cambridge and New Delhi: The Ancient India and Iran Trust Booklands House.

Allchin, F.R. and D.K. Chakrabarti (eds.) 1978 *A Source-book of Indian Archaeology* Vol. I. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

Allchin, F.R. and D.K. Chakrabarti (eds.) 2003 *A Source-book of Indian Archaeology* Vol. III. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

Aruz, J. 2018 "Reflections on Fantastic Beasts of the Harapan World. A View from the West", in Frenez, D., G.M. Jamison, R.W. Law, M. Vidale and R.H. Meadow (eds.) 2018: 26-32.

Bhan, S. 1970 "Archaeological Evidence of the Changes of Yamuna in Sub-Recent Times", *Journal of Haryana Studies,* 2 (1-2):1-3. Kurukshetra.

Banerji, R.D. 1922-23 "Exploration and Research, Western Circle, Sind, Mohenjo-daro", *ARASI* (1922-23): 102-104.

Bates, J., C.A. Petrie and R.N. Singh. 2017 "Cereals, Calories and Change: Exploring Approaches to Quantification in Indus Archaeobotany", *Archaeol Anthropol Sci.* online.

Besenval, R. 1992 "Recent Archaeological Surveys in Pakistani Makran", in Jarrige, C. (ed.) 1992: 25-35.

Besenval, R. 1994 "The 1992-1993 Field-Seasons at Miri Qalat: New Contributions to the Chronology of Protohistoric Settlement in Pakistani Makran", in Parpola and Koskikallio (eds.) 1994: 81-91.

Besenval, R. 1997 "The Chronology of Ancient Occupation in Makran: Results of the 1994 Season at Miri Qalat, Pakistan Makran", in Allchin and Allchin (eds.) 1997: 199-216.

Besenval, R. 2000 "New Data for the Chronology of the Protohistory of Kech-Makran (Pakistan) from Miri-Qalat 1996 and Shahi-Tump 1997 Field Season", in Taddei and de Marco (eds.) 2000: 161-187.

Besenval, R. 2005 "Chronology of Protohistoric Kech-Makran", in Jarrige, C. and Lefèvre (eds.) 2005: 1-9.

Besenval, R and J. Desse 1995 "Around or Lenghwize? Fish Cutter-Up Areas on the Baluchi Coast (Pakistani Makran)", *The Archaeological Review,* 4 (I and II): 133-149.

Besenval, R., V. Marcon, C. Buquet and B. Mutin 2005 "Shahi-Tump: Results of the Last Field-Seasons (2001-2003)", in Franke-Vogt and Weisshaar (eds.) 2005: 49-56.

Besenval, R. and P. Marquis 1993 "Excavations in Miri Qalat (Pakistani Makran): Results of the First Field-Season (1990)", in Gail and Mevissen (eds.) 1993: 131-148.

Braidwood, R.J. and B. Howe 1960 "Prehistoric Investigations in Iraqi Kurdistan", *Studies in American Oriental Civilization* 31. Chicago: Univ. of Chicago Press.

Brooks, C.E.P. 1922 *Evolution of Climate.* London: Benn Brothers. (reprinted NY, AMS Press,1978).

Casal, J.-M. 1961 *Fouilles de Mundigak.* Paris: Librairie C. Klincksieck.

Casal, J.-M. 1964 *Fouilles d'Amri.* Paris: Librairie C. Klincksieck.

Casal, J.-M. 1966 "Nindowari - a Chalcolithic Site in South Baluchistan", *Pakistan Archaeology,* 3: 10-21.

Casal, J.-M. 1979 "Amri: an Introduction to the History of the Indus Civilization", in Agrawal and Chakrabarti (eds.) 1979: 100-112.

Casanova, M. 1992 "The Sources of the Lapis-Lazuli found in Iran", in Jarrige, C. (ed.) 1992: 49-52.

Casanova, M. 1994 "Lapis Lazuli Beads in Susa and Central Asia: a Preliminary Study", in Gail and Mevissen (eds.) 1993: 137-145.

Chakrabarti, D.K. 1978 "Lapis Lazuli in Early India", *Man and Enviornment,* 2: 51-58.

Chakrabarti, D.K. 1979 "The Problem of Tin in Early India - a Preliminary Survey", *Man and Enviornment,* 3: 61-74.

Chakrabarti, D.K. 1988 *A History of Indian Archaeology from the Beginning to 1947.* New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

Chakrabarti, D.K. 2018 "Research on the Indus Civilization, c.2010-2019", *Readings in the Archaeology of the Indus Civilization.*

Childe, G.V. 1936 *Man Makes Himself.* London: Penguin Books.

Cortesi, E., M. Tosi, A. Lazzari and M. Vidale 2008 "Cultural Relationships beyond the Iranian Plateau: the Helmand Civilization, Baluchistan and the Indus Valley in the 3rd Millennium BCE", *Paléorient,* 32 (2): 5-35.

Dales, G.F. and J.M. Kenoyer (eds.) 1986 *Excavations at Mohenjo Daro, Pakistan: the Pottery.* Pennsylvania: Univ. of Pennsylvania Museum Publication.

Dales, G.F., J.M. Kenoyer and the Staff 1991 *Harappa Excavations 1986-1990 a Multidisciplinary Approach to Third Millennium Urbanism.* Monographs in World Archaeology No. 3. Madison: Prehistory Press.

Dani, A.H. 1970-71 *Excavations in the Gomal Valley. Ancient Pakistan,* V.

Dani, A.H. 1986 "Bahrain and the Indus Civilization". in Shaikha Haya and M. Rice (eds.) 1986: 383-388.

Dani, A.H. (ed.) 1981 *Indus Civilization: New Perspectives.* Islamabad: Center for the Study of the Civilizations of Central Asia, Quaid-i-Azam Univ.

Dave, S.S. 1966 "The Tiger-Huntress Seal of the Indus Valley", All-India Oriental Conference XXII Session, Gauhati, Summaries: 75.

de Cardi, B. 1959 "New Wares and Fresh Problems from Baluchistan", *Antiquity,* 33: 15-24.

de Cardi, B. 1965 "Excavation and Reconnaissance on Kalat, West Pakistan", *Pakistan Archaeology,* 2: 86-182.

de Cardi, B. 1983 *Archaeological Surveys in Baluchistan,1948 and 1957.* Univ. of London Institute of Archaeology Occasional Publication No. 8. London.

During-Caspers, E.C.L. 1985 "A Possible Harappan Contact with the Aegean World", in Schotsmans, J. and M. Taddei (eds.) 1985: 65-86.

During-Caspers, E.C.L. 1993 "Another Face of the Indus Valley Magico-Religious System", in Gail, A.J. and G.J.R. Mevissen (eds.) 1993: 65-86.

During-Caspers, E.C.L. 1997 "Bactrian Elements in the Harappan Glyptic Repertoire", in Allchin and Allchin (eds.) 1997: 253-263.

During-Caspers, E.C.L. 2008 "The Murghabo-Bactorian Archaeological Complex and the Indus Script", *Intercultural Relations between South and Southwest Asia. Studies in commemoration of E.C.L. During Caspers (1934-1996).* BAR International Series 1826: 260-267.

Durrani, F.A. 1964 "Stone Vases as Evidence of Connection between Mesopotamia and the Indus Valley", *Ancient Pakistan,* I: 51-96.

Durrani, F.A. 1981a "Indus Civilization: Evidence of West Indus", in Dani (ed.) 1981: 133-137.

Durrani, F.A. 1981b "Rahman Dheri and the Birth of Civilization in Pakistan", *Bulletin of the Institute of Archaeology,* 18: 191-207. University of London.

Durrani, F.A. 1984 "Some Early Harappan Sites in Gomal and Bannu Valleys", in Lal and Gupta (eds.) 1984: 505-510.

Durrani, F.A. 1988 *Excavations in the Gomal Valley. Rehman Dheri Excavation Report No. 1. Ancient Pakistan,* VI.

Ehrich, R.W. (ed.) 1992 *Chronologies in Old World Archaeology* (3rd ed.). Chicago: The Univ. of Chicago Press.

Fairservis, W.A. 1956 "Excavations in the Quetta Valley, West Pakistan", *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History,* 45 (2): 169-402.

Fairservis, W.A. 1959 "Archaeological Surveys in the Zhob and Loralai District, West Pakistan", *Anthropological Papers of the American Museum of Natural History,* 47 (2): 277-448.

Fairservis, W.A. 1967 "The Origin, Character and Decline of an Early Civilization", *American Museum Novitates,* 2302: 1-48.

Fairservis, W.A. 1975 *The Roots of Indus Civilaization - the Archaeology of Early Indian Civilization* (2nd edition.). Chicago: The Univ. of Chicago Press.

Flam, L. 1999 "Ecology and Population Mobility in the Prehitoric Settlement of the Lower Indus Valley, Sindh, Pakistan", in Meadow and Meadow (eds.)1999: 313-323.

Flam, L. 2013 The "Sindh Archaeological Project: Explorations in the Lower Indus Basin and Western Sindh", in Abraham, S.A., P. Gullapalli, T.P. Raczek and U.Z. Rizvi (eds.) 2013: 91-106.

Flohr, P., Fleitmann, D., Matthews, R., Matthews, W. and Black, S. 2013 "Evidence of Resilience to Past Climate Change in Southwest Asia: Early Farming Communities and the 9.2 and 8.2 ka Events", *Quaternary Science Reviews,* 136: 23-39.

Francfort, H.P. 1978-79 "About the Shortughai Sequence from Mature Harappan to Late Bactrian: Bronz Age in Eastern Bactria (N.E. Afganistan)", *Purātattva,* 10: 91-94.

Francfort, H.P. 1983 "The Relationship between Urban Lowlands and Mountaineous Areas in Protohistory as seen from Shortughai", *Journal of Central Asia,* 8 (2):125-131.

Francfort, H.P. 1984 "The Early Periods of Shortughai (Harappan) and the Western Bactrian Culture of Dashly", in Allchin, B. (ed.) 1984: 170-175.

Franke-Vogt, U. 2008 "Baluchistan and the Borderlands", in Pearsall (ed.) 2008: 651-670.

Franke-Vogt, U., S.S. Ul-Haq and M.H. Khan Khattak 2000 "Archaeological Exploration in the Karnach Valley (Las Bela, Balochistan)", in Taddei and de Marco (eds.) 2000: 189-213

Franke-Vog, U. and A. Ibrahim 2005 "A New Perspective of an Old Site: Reopening Excavations at Sohr Damb/ Nar (Balochistan)", in Jarrige, C. and Lefèvre (eds.) 2005: 105-115.

Franke-Vogt, U. and V. Lefèvre (eds.) 2005 *South Asian Archaeology 2001.* Archen: Linden Soft.

Franke-Vogt, U. and H.-J. Weisshaar (eds.) 2005 *South Asian Archaeology 2003.* Archen: Deutsches Archäologisches Institut.

Frenez D. 2018 "Private Person or Public Persona? Ues and Significance of Standard Indus Seals as Markers of Formal Socio-Economic Identies". in Frenez, D., G.M. Jamison, R.W. Law, M. Vidale and R.H. Meadow (eds.) 2018: 166-193.

Frenez, D. and M. Tosi 2005 "The Lothal Sealings: Records from an Indus Civilization Town at the Eastern End of the Maritime Trade Circuits across the Arabian Sea", in Perna, M. (ed.) *Studi in Onore di Enrica Fiandra, Contiributi di archeologia egea e vicinorientale.* 65-103.

Frenez, D. and M. Tosi (eds.) 2013 *South Asian Archaeology 2007: vol. 1.* BAR International Series 2454. Oxford: Hadrian Books..

Frenez, D., M.D. Esposti, S. Méry and J.M. Kenoyer 2016 "Bronze Age Salūt (ST1) and the Indus Civilization: Recent Discoveries and New Insights on Regional Interaction", *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 46: 107–124.

Frenez, D., G.M. Jamison, R.W. Law, M. Vidale and R.H. Meadow (eds.) 2018 *Walking with Unicorn, Social Organization and Material Culture in Ancient South Asia. Jonathan Mark Kenoyer Felicitation Volume.* ISMEO.

Frifelt, K. and P. Sørensen (eds.) 1989 *South Asian Archaeology 1985.* London: Nordic Institute fo Asian Studies Occasinal Papers No.4.

Fuller, D.Q. 2006 "Agricultural Origins and Frontiers in South Asia: A

Working Synthesis", Journal of World Prehistory 20 (1): 86.

Fuller, D.Q. 2011 "Finding Plant Domestication in the Indian Subcontinent", *Current Anthropology,* 52 (4): 347-362.

Fuller, D.Q. and C.J. Stevens 2018 "Sorghum Domestication and Diversification: a Current Archaeobotanical Perspective", in Mercuri, A.M., A.C. D'Andrea, R. Fornaciari, A. Höhn (eds.) *Plants and People in the African Past. Progress in African Archaeobotany.* 427-452.

Gadd, C.J. 1932 "Seals of Ancient Indian Style found at Ur", *Proceedings of the British Academy, London,* 18:1-22.

Gadd, C.J. and S. Smith 1924 "The New Links between Indian and Babylonian Civilization", *The Illustrated London News* October 4: 614-616.

Gail, A.J. and G.J.R. Mevissen (eds.) 1993 *South Asian Archaeology 1991.* Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Green, A.S. 2016 "Finding Harappan Seal Carvers: an Operational Sequence Approach to Identifying People in the Past", *Journal of Archaeological Science* 72: 128-141.

Gupta, S.P. 1979a "Baluchistan and Afganistan: Refuge Area or Nuclear Area", in Agrawal and Chakrabarti (eds.) 1979: 9-15.

Gupta, S.P. 1979b *Archaeology of Soviet Central Asia and the Indian Borderlands.* Delhi: B.R. Publishing Co.

Hakemi, A. 1992 "The Copper Smelting Furnaces of the Bronze Age in Shahdad", in Jarrige, C. (ed.) 1992: 119-132.

Harvey and Schumm 1991 "Indus River Dynamics and the Abandonment of Mohenjo Daro", in Meadows and Meadows (eds.) 1991: 333-348.

Hazra, R.C. 1969 "Further light on the God of the Famous Mohenjo-Daro Seals, Our Heritage", *Bulletin of the Department of Postguraduate Training and Research,* Sandkrit College, Calcutta, XVII (1): 1-29.

Jamison, G.M. 2018 "The Organization of Indus Unicorn Seal Production, a Multi-faceted Investigation of Technology, Skill, and Style", in Frenez, D., G.M. Jamison, R.W. Law, M. Vidale and R.H. Meadow (eds.) 2018: 272-291.

Jarrige, C. (ed.) 1992 *South Asian Archaeology 1989.* Monographs in World Archaeology 14. Madison: Prehistory Press.

Jarrige, C. and V. Lefèvre (eds.) 2005 *South Asian Archaeology 2001.* Paris: Reserche sur les Civilisation.

Jarrige, J.-F. 1979a "Excavation at Mehrgarh, Baluchistan: the Significance in the Prehistoric Context of the lndo-Pakistan Borderland", in Taddei (ed.) 1979: 463-535.

Jarrige, J.-F. 1986 "Excavations at Mehrgarh - Nausharo", *Pakistan Archaeology,* 10-22: 63-131.

Jarrige, J.-F. 1989 "Excavation at Nausharo 1987-88", *Pakistan Archaeology,* 24: 21-67.

Jarrige, J.-F. 1979b "Excavations at Mehrgarh - Pakistan", in Lohuizen-de Leeuw (ed.) 1979: 76-90.

Jarrige, J.-F. *et al.* (eds.) 1995 *Mehrgarh, Field Reports 1974-85 from Neolithic Times to the Indus Civilization.* Karachi: The Department of Culture and Tourism, Government of Sindh, Pakistan.

Kamada, H. 1990 "Chronological Change of Designs on the Harappan Painted Pottery in Sind", *Bulletin of the Ancient Orient Museum,* 11: 171-185. Tokyo.

Kennedy, K. and G. Possehl (eds.) 1984 *Studies in the Archaeology and Palaeoanthropology of South Asia.* New Delhi: Oxford and IBH Publishing Co.

Kenoyer, J.M. 1991 "Urban Process in the Indus Tradition: a Preliminary Model from Harappa", in Meadow (ed.) 1991: 29-60.

Kenoyer, J.M. 2008 "Indus and Mesopotamian Trade Networks: New Insights from Shell and Carnelian Artifacts Intercultural Relations between South and Southwest Asia", in Olijdam, E. and R.H. Spoor (eds.) 2008: 19-28.

Kenoyer, J.M., M. Vidale and K.K. Bhan 1991 "Contemporary Stone Beadmaking in Khambhat, India: Patterns of Craft Specialization and Organization of Production as reflected in the Archaeological Record", *World Archaeology,* 23(1): 45-63.

Khan, F.A. 1965 "Excavations at Kot Diji", *Pakistan Archaeology,* 2: 11-85.

Khan, F.A. 1981 "Kot Diji Culture - it's Greatnsess", in Dani (ed.) 1981: 15-24.

Kohl, P.L. 1975 "Carved Chlorite Vessels: a Trade in finished Commodities in the Mid-Third Millennium", *Expedition,* 18 (1): 18-31.

Kohl, P.L. 1979 "The 'World Economy' of West Asia in the Third Millennium BC", in Taddei, M. (ed.) 1979: 55-86.

Kohl, P.L. 1986 "The Lands of Dilmun: Changing Cultural and Economic Relatios during the Third to Early Second Millenia B.C.", in Shaikha Haya and Rice (eds.) 1986: 67-375.

Konasugawa, A, S. Shudai, S. Kimura, T. Ueno and H. Endo 2011 "Report on the Survey of the Archaeological Materials of Prehistoric Pakistan, stored in Aichi Prefectural Ceramic Museum. Part III: Emir Ware and Quetta Style Pottery", *The Bulletin of Tsurumi Univ.,* 48: 73-110.

Konasugawa, A. and M. Koiso 2018 "The Site of Indus Seals and its Significance ", in Frenez, D., G.M. Jamison, R.W. Law, M. Vidale and R.H. Meadow (eds.) 2018: 292-317.

Kondo, H., Y. Hojo, M. Koiso, A. Noguchi, H. Noguchi and A. Uesugi 2006 "A Reconcideration of the Kot Diji Culture in the Gomal Plain: Preliminary Report of the First Season 2004-05", *Ancient Pakistan* XVII: 1-8.

Kureshy, K.U. 1977 *A Geography of Pakistan.* Karachi: Oxford Univ. Press.

Lal, B.B. 1979 "Kalibangan and Indus Civilization", in Agrawal and Chakrabarti (eds.) 1979: 65-97.

Lal, B.B. and S.P. Gupta (eds.) 1984 *Frontier of the Indus Civilization - Sir Mortimer Wheeler Commemoration Volume.* New Delhi: Books and Books.

Lal, B.B., B.K. Thapar, J.P. Joshi and M. Bala (eds.) 2003 *Excavations at Kalibangan: the Early Harappans (1960-69).* New Delhi: Archaeological Survey of India.

Lamberg-Karlovsky, C.C. 1970 *Excavations at Tepe Yahya, Iran*

1967-1969. American School of Prehistoric Research, Peabody Museum, Harvard University Bulletin 27.

Lamberg-Karlovsky, C.C. 1971 "The Proto-Elamite Settlement at Tepe Yahya", *Iran*, 9: 87-96.

Lamberg-Karlovsky, C.C. 1972 "Tepe Yahya 1971 Mesopotamia and the Indo-Iranian Borderlands", *Iran*, 10: 89-100, .

Lamberg-Karlovsky, C.C. 1994 "The Oxus Civilization: the Bronze Age of Central Asia", *Antiquity*, 68 (259), Special Section. The Oxus Civilization: the Bronze Age of Central Asia: 353-354.

Lamberg-Karlovsky and T.W. Beale (eds.) 1986 *Excavations at Tepe Yahya, Iran 1967-1975: the Early Periods.* Cambridge: Peabody Museum.

Lamberg-Karlovsky, C.C. and M. Tosi 1973 "Shahr-i Sokhta and Tepe Yahya: Tracks on the Earliest History of the Iranian Plateau", *East and West*, 13(1-2): 21-57.

Law, R.W. 2002 "Potential Steatite Source for the Indus Civilization", in Halim, M.A., A. Ghafoor (eds.) *Indus Civiliztion. Dialougue among Civilizations*: 158-167. Islamabad: Ministry of Minorities, Culture. Sports, Tourrism and Youth Affairs.

Law, R.W. 2005a "A Diachronic Examination of Lithc Exchange Netwarks during the Urban Transformation of Harappa", in Franke-Vog, U. and H.-J. Weisshaar (eds.) 2005: 111-121.

Law, R.W. 2005b "Regional Interaction in the Prehistoric Indus Valley: Initial Results of Rock and Mineral Sourcing Studies at Harappa", in Jarrige, C. and V. Lefèvre (eds.) 2005: 179-190.

Law, R.W. 2006 "Moving Mountains: the Trade and Transport of Rocks and Minerals within the Greater Indus Valley Region", in Robertson, E.C., J.D. Seibert, D.C. Fernandez and M.U. Zender (eds.) 2006 *Space and Spatial analysis in Archaeology*: 301-313.

Law, R.W. 2011 *Inter-Regional Interaction and Urbanism in the Ancient Indus valley: a Geological Provenience Study of Harappa's Rock and Mineral Assemblage.* Occasional Paper II Linguistics, Archaeology and the Human Past. Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, Japan.

Law, R.W. and R.H. Baqri 2003 "Black Chert Source Identified at Nammal Gorge, Salt Range", *Ancient Pakistan* XIV: 34-40.

Law, R.W., R.H. Baqri, K. Mohamood and M. Khan 2005 "First Result of a Neutron Activation Study comparing Rohri Hills Chert to other Chert Sources in Pakistan and Archaeological Samples from Harappa", *Ancient Sindh* 7: 7-25.

Law, R.W. and J.H. Burton 2006a "A Technique for Determining the Provenance of Harappan Banded Limestone "Ringstone" using ICP-AES", *Preceedings of the 34th International Symposium on Archaeometly, Zaragoza*: 308-314.

Law, R.W. and J.H. Burton 2006b "Non-destructive Pb Isotope Analysis of Harappan Lead Artifacts using Ethylenediaminetetraacetic Acid and ICP-MS. (Practically)", *Preceedings of the 34th International Symposium on Archaeometly, Zaragoza*: 181-185.

Law, R.W. and J.H. Burton 2008 "Non destructive Pb Isotope Sampling and Analysis of Archaeological Silver using EDTA and ICP-MS", *American Laboratory september.*

Law, R., A. Carter, K. Bhan, A. Malik and M. Glasock 2013 "INAA of Agate Sources and Artifacts from the Indus, Helmand, and Thailand Regions", in Frenez, D. and M. Tosi (eds.) 2013: 177-184.

Lohuizen-de Leeuw, van J.E. (ed.) 1979 *South Asian Archaeology 1975.* Leiden: Brill.

Lohuizen-de Leeuw, van J.E. and J.M.M. Ubaghs (eds.) 1974 *South Asian Archaeology 1973.* Leiden: Brill.

Mackay, E.J.H. 1933 "Decorated Camelian Bead", *Man*, 33: 143-146.

Mackay, E.J.H. 1938 *Further Excavations at Mohenjo-daro.* 2 Vols. New Delhi. (rep.1976 New Delhi: Gayatri Offset Press).

Mackay, E.J.H. 1937 "Beads Making in Ancient Sind", *Journal of the American Oriental Society*, 57: 1-15.

Marshall, J. 1924a "First Light on a Long Forgotten Civilization", *The Illustrated London News.* September 20: 528-32,548.

Marshall, J. 1924b "Mohenjo-daro", ARASI (1923-24): 47-54.

Marshall, J. 1925 "Mohenjo-daro", ARASI (1925-26):72-98.

Marshall, J. 1928 "The Indus Culture", ARASI (1926-27): 51-60.

Marshall, J. 1931 *Mohenjo-daro and the Indus Civilization.* 3 Vols. London. (Rep. 1973 Delhi: Indological Book House).

Marshall, J. and E.J.H. Mackay and R.B. Daya Ram Sahni 1927 "The Prehistoric Civilization of the Indus", ARASI (1924-25): 60-63.

Meadow, R.H. (ed.) 1991 *Harappa Excavations 1986-90. a Multidisciplinary Approach to Third Millennium Urbanism.* Monographs in World Archaeology No. 3. Madison.

Meadows, A. and P. Meadows (eds.) 1999 *The Indus River, Biodiversity Resources Humankind.* Karachi: Oxford Univ. Press.

Meadow, R.H., J.M. Kenoyer and R. Wright (eds.) 1996 *Harappan Archaeological Research Project, Harappa Excavations 1996.* Karachi: Gov. of Pakistan.

Mille, M., D. Bourgarit and R. Besenval 2005 "Metallurgical Study of 'Leopards Weight' from Shahi-Tump (Pakistan)", in Jarrige, C. and Lefèvre (eds.) 2005: 236-244.

Miller, H. M.-L. 2000 "Reassesing the Urban Structure of Harappa: Evidence from Craft Production Distribution", in Taddei. and de Marco (eds.) 2000: 77-100.

Miller, H. M.-L. 2005 "Investigating Copper Production at Harappa: Surveys, Excavations and Finds", in Jarrige, C. and V. Lefèvre ed. 2005: 245-252.

Miller, H. M.-L. 2006 "Water Supply, Labor Requirements, and Land Ownership in Indus Floodplain Agricultural Systems, Agriculture and Irrigation in Archaeology", *Cotsen Institute of Archaeology Press*: 92-128.

Miller, H. M.-L. 2007 "Associations and Ideologies in the Locations of Urban Craft Production at Harappa, Pakistan (Indus Civilization)", *Archaeological Papers of the American Anthropological Association*, 17 (1): 37–51.

Miller, H. M.-L. 2009 *Archaeological Approachies to Technology.* Walnut Creek, California: Left Coast Press.

Mughal, M.R. 1970 *The Early Harappan Period in the Greater Indus Valley and Northern Baluchistan (c.3000-2400 B.C.).*

Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Pennsylvania, Philadelphia. Univ. Microfilms International. Michigan: Ann Arbor.

Mughal, M.R. 1974 "New Evidence of the Early Harappan Culture from Jalilpur, Pakistan", *Archaeology,* 27 (2): 106-113.

Mughal, M.R. 1981 "New Archaeological Evidence from Bahawalpur", in Dani (ed.) 1981: 33-43.

Mughal, M.R. 1990 "The Protohistoric Settlement Patterns in the Cholistan Desert", in Taddei (ed.) 1990: 144-156.

Olijdam, E. 1997 "Babylonian Quest for Lapis Lazuli and Dilmun during the City III Period", in Allchin and Allchin (eds.) 1997.

Olijdam, E. and R.H. Spoor. (eds.) 2008 *Intercultural Relations between South and Southwest Asia. Studies in commemoration of E.C.L. During Caspers (1934-1996).* BAR International Series 1826. Oxford: Hadrian Books.

Olijdam, E. and Hélène David-Cuny 2018 "Dilmun-Meluhhan Relations Revisited in Light of Observations on Early Dilmun Seal Production during the City IIa-c Period (c. 2050-1800 BC)", in Frenez, D., G.M. Jamison, R.W. Law, M. Vidale and R.H. Meadow (eds.) 2018: 406-432

Organization for Surveying and Cartography GEOKART (ed.) 1984 *National Atlas of the Democratic Republic of Afghanistan.* Warsaw: Fair Drawing and Printing.

Parpola, A. and P. Koskikallio (eds.) 1994 *South Asian Archaeology 1993.* 2 Vols. Helsinki: Academia Scientiarum Fennica.

Pastner, S. and L. Flam (eds.) 1982 *Anthropology in Pakistan.* Karachi: Indus Publication.

Pearsall, D.M. (ed.) 2008 *Encyclopedia of Archaeology.* New York: Academic Press.

Piggott, S. 1950 *Prehistoric India.* London: Penguin Books.

Possehl, G.L. 1992 "The Harappan Cultural Mosaic: Ecology revisited", in Jarrige, C. (ed.) 1992: 237-244.

Possehl, G.L. 1999a *Indus Age - the Beginnings.* New Delhi: Oxford & IBH Publishing Co.

Possehl, G.L. 1999b "Prehistoric Population and Settlement in Sindh", in Meadows and Meadows 1999: 393-408.

Possehl, G.L. (ed.) 1992a *Harappan Civilization: a Contemporary Perspective.* New Delhi: Oxford and IBH Publishing Co.

Possehl, G. L. (ed.) 1992b *South Asian Archaeological Studies.* New Delhi: Oxford IBH Publishing Co.

Possehl, G. L. (ed.) 2008 "Indus Folklore: an Unknown Story on Some Harappan Objects", in Olijdam and Spoor (eds.) 2008: 140-144.

Quivron, G. 1980 "Les Marques incisés sur les Pottries de Mehrgarh au Baluchistan, du Milieu du 4e Millénaire a la Première moitie du 3e Millénaire", *Paréorient,* 6: 269-280.

Quivron, G. 1994 "The pottery Sequence from 2700 to 2400 BC at Nausharo, Baluchistan", in Parpola, A. and P. Koskikallio (eds.) 1994: Ⅱ: 629-644.

Quivron, G. 2000 "The Evolution on the Mature Indus Pottery Style in the Light of the Excavations at Nausharo, Pakistan", *East and West,* 50 (1-4): 147–190.

Quivron, G. 2008 "New Light on the Kulli Culture covered by Sir Aurel Stein at Kulli and Mehi in Southern Baluchistan", in Raven (ed.) 2008: 47-59.

Raikes, R. L. 1964 "Physical Environment and Human Settlement in Prehistoric Times in the Near and Middle East: a Hydrological Approach", *East and West,* 15; 179-193.

Raikes, R. L. 1965 "The Ancient Gabarbands of Baluchistan", *East and West,* 15: 26-35.

Rao, S. R. 1956-57 "The Excavatlons at Lothal", *Larit Kalā,* 3-4: 82-85.

Rao, S. R. 1962 "Further Excavations at Lothal", *Larit Kalā,* 11: 14-30.

Rao, S. R. 1973 *Lothal and the Indus Civilization.* London: Asia Publishing House.

Rao, S. R. 1979 *Lothal - a Harappan Port Town - 1955-62.* Vol. 1. Memoir of the Archaeological Survey of India, No. 78. New Delhi: ASI.

Rao, S.R. 1985 *Lothal - a Harappan Port Town - 1955-62.* Vol. 2. Memoir of the Archaeological Survey of India, No. 78. New Delhi: ASI.

Rao, S R. 1986 "Trade and Cultural Contacts between Bahrain and India in the Third and Scecond Millennia B.C", in Shaikha Haya and Rice (eds.) 1986: 376-382.

Ratnagar, S. 1991 *Enquiries into the Political Organization of Harappan Society.* Pune: Ravish Publishers.

Ratnagar, S. 2004 *Trading Encounter.* Karachi: Oxford Univ. Press.

Raven, E. M. (ed.) 2008 *South Asian Arhaeology 1999.* Groningen: Egbert Forsten.

Renfrew, C. 1975 "Trade as Action at a Distance: Questions of Integration and Communication", in Sabloff and Lamberg-Karlovsky (eds.) 1975: 3-59.

Roy, S. 1953 "Indian Archaeology from Jones to Marshall (1784-1902)", *Ancient India,* 9: 4-28.

Sankalia, H.D. 1977 P*rehistory of India.* New Delhi: Munshiram Monoharlal Publishers.

Sabloff, J.A. and C.C. Lamberg-Karlovsky (eds.) 1975 *Ancient Civilizaton and Trade.* Albuquerque: Univ. of New Mexico Press.

Schotsmans, J. and M. Taddei (eds.) 1985 *South Asian Archaeology 1983.* 2Vols. Naples: Istituto Universitario Orientale.

Schuldenrein, J., R. P. Wright, M. R. Mughal, M. Afzal Khan 2004 "Landscapes, Soils, and Mound Histories of the Upper Indus Valley, Pakistan: New Insights on the Holocene Enviornments near Ancient Harappa", *Journal of Archaelogical Science* 31: 777-797.

Schuldenrein, J., R. P. Wright and M. Afzal Khan 2007 "Harappan Geoarchaeology Reconsidered: Holocene Lnadscapes and Enviornments of the Greater Indus Plain", in Stone (ed.): 83-116.

Shaffer, J.G. 1982 "Harappan Commerce: an Alternative Perspective", in Pastner and Flam (eds.) 1982: 166-210.

Shaffer, J. G. 1992 "The Indus Valley, Baluchistan and Helmand Traditions: Neolithic through Bronze Age", in Ehrich, R. (ed.) 1:

441–464.

Shaikha Haya and Rice (eds.) 1986 *Bahrain through the Ages the Archaeology.* London: Routledge

Shudai, H. 1997 “Searching for the Early Harappan Culture - Analysis of the Pottery Styles of Pre-Harappan Cultures”, *Indo Kōko Kenkyū,* 18: 40-51.

Shudai, H. 2007 “Recetn Studies in Japan on the Formation of Indus Civilization”, *Indo Kōko Kenkyū,* 28: 69-73.

Shuda:, H. 2010 “Kulli Pottery and Its Meanings in South Asian Prehistory”, Indo Kōko Kenkyū, 31: 57-68.

Shudai, H. 2016 “Chronology of the Neolithic Culture in Balochistan”, *The Bulletin of Tsurumi Univ.,* 53: 59-68.

Shudai, H., A. Konasukawa, H. Endo and S. Kimura 2009 “Report on the Survey of the Archaeological Materials of Prehistoric Pakistan, stored in Aichi Prefectural Ceramic Museum. Part I: Painted Pottery of Nal Ware”, *The Bulletin of Tsurumi Univ.,* 46: 75-108.

Shudai, H., A. Konasukawa, H. Endo, S. Kimura and T. Ueno 2010 “Report on the Survey of the Archaeological Materials of Prehistoric Pakistan, stored in Aichi Prefectural Ceramic Museum. Part II: Kulli Ware”, *The Bulletin of Tsurumi Univ.,* 47: 53-115.

Stein, M.A. 1929 *An Archaeological Tour in Waziristan and Northern Baluchistan.* Memoirs of the Archaeological Survey of India No. 37.

Stein, M.A. 1931 *An Archaeological Tour in Gedrosia.* Memoirs of the Archaeological Survey of India No. 43.

Stein, M.A. 1942 “A Survey of Ancient Sites along the ‘Lost’ Sarasvati River”, *Geographicla Journal,* 99: 173-182.

Stone, E.C. (ed.) 2007 *Settlement and Society: Essays dedicated to Rober McCormick Adams.* Costen Institute of Archaeology Press at UCLA.

Survey of Pakistan 1986 *Atlas of Pakistan.* Islamabad: Gov. of Pakistan.

Taddei, M. (ed.) 1979 *South Asian Archaeology 1977.* 2Vols. Naples: Instituto Universitario Orientale.

Taddei, M. (ed.) 1990 *South Asian Archaeology 1987.* 2Vols. Rome: Instituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

Taddei, M. and G. de Marco (eds.) 2000 *South Asian Archaeology 1997.* 3Vols. Rome: Istituto Italiano per L’africa e L’oriente: .

Tosi, M. 1970 “On the Route for Lapis Lazuli , parts I and II”, *The Illustrated London News* Jan. 24: 24-25; Feb. 7: 24-25.

Tosi, M. 1979 “The Proto-Urban Cultures of Eastern Iran and the Indus Civilization. Note and Suggestions for a Spatio-Temporal Frame to study the Early Relations between India and Iran”, in Taddei (ed.) 1979: 149-171.

Tosi, M. 1986 “Early Maritime Cultures of the Arabian Gulf and the Indian Ocean”, in Shaikha Haya and Rice (eds.) 1986: 94-107.

Uesugi, A. 2008 “Cultural Interactions between the Indus and the Iranian Plateau”, *International Conference on Cultural Relationships between the Indus and the Iranian Plateau during the Third Millennium BCE*: 20-24. Kyoto: Reseatch Institure for Humanity and Nature.

Uesugi, A. 2012 “Pottery from Blochistan in Ancient Orient Museum, Tokyo, Part I: from the Late Fourth to the Early Thitd Millennia BCE”, *Bulletin of Ancient Orient Museum,* 32: 1-109.

Uesugi, A. 2013 “Pottery from Blochistan in Ancient Orient Museum, Tokyo, Part 2: the Late Thitd Millennia BCE”, *Bulletin of Ancient Orient Museum,* 33: 1-74.

Uesugi, A. (ed.) 2018 *Current Resarche on Indus Archaeology.* Research Group for South Asian Archaeology. Archaeological Research Institute, Kansai University.

Uesugi, A. 2019 “A Note on the Interregional Interactions between the Indus Civilization and the Arabian Peninsula during the Third Millennium BCE”, in Nakamura, S., T. Adachi, M. Abe (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in Honour of Sumio Fujii.* 337-355. Rokuichi Syobou, Japan.

Uesugi, A., M. Kumar and V. Dangi 2017 “Indus Stone Beads in the Ghaggar Plain with a Focus on the Evidence from Farmana and Mitathal”, in Frenez, D., G.M. Jamison, R.W. Law, M. Vidale and R.H. Meadow (eds.) 2018: 568-591.

Vats, M.S. 1940 *Excavations at Harappa.* 2Vols. Delhi. (rep. 1974 Varanasi.: Bhartiya Publishing House).

Vidale, M. 2000 *The Archaeology of Indus Crafts: Indus Craftspeople and Why We study Them.* IsIAO - Rome.

Vidale, M. and H. Miller 2000 “On the Development of Indus Technical Virtuosity and its Relation to Social Structure”, in Taddei. and de Marco (eds.) 2000: 115-132.

Vidale, M. and Lazzari 2017 *Lapis Lazuri Bead Making at Shahar-i Sokhta.* ISMEO.

Weber, S., A. Kashyap and D. Harriman 2010 “Does Size Matter: the Role and Significance of Cereal Grains in the Indus Civilization”, *Archaeological and Anthropological Siences* 2: 35–43.

Wheeler, R.E.M. 1953 *The Indus Civilization.* 1st edition. Supplementary Volume to the Cambridge History of India. London.（1960 年刊行の第 2 版はウィーラー、R.E.M.（曽野寿彦訳）1966『インダス文明』みすず書房 . として邦訳されている。

Wheeler, R.E.M. 1947 “Harappa 1946: the Defences and Cemetary R.37”, *Ancient India,* 3: 58-130.

Wheeler, R.E.M. 1968 *The Indus Civilization,* 3rd. ed. Cambridge Univ. Press.

Widorn, V., U. Franke-Vogt, and P. Latschenberger (eds.) *South Asian archaeology and Art 2012.* Tunhout: Brepols.

Wright, R. and C. Hritz 2013 “Satellite Remote Sensing Imagery: New Evidence for Site Distributions and Ecologies in the Upper Indus”, Frenez, D. and M. Tosi (eds.) 2013, Vol. 1: 315-321.

Writght, R. 2016 “Konar Sandal South, Nindowari, and Lakhan Jo Daro –beyond the Limits of a known World”, in Widorn, V., U. Franke-Vogt and P. Latschenberger (eds) 2016: 25-35.

上杉彰紀　2008「インダス文明社会の成立と展開　－地域間交流の視点から」『古代文化』60 (2): 111-120.

上杉彰紀　2010『インダス考古学の展望』総合地球環境学研究所 .

上杉彰紀　2012「先インダス文明期とインダス文明期における

凍石印章の製作技術とその変遷に関する考古学的研究」『日本オリエント学会第 54 回公開講演・研究発表要旨集』、52.
上杉彰紀　2013「ガッガル平原におけるインダス文明期の諸相　－文明社会の成立と衰退」『西アジア考古学』14: 1-24.
上杉彰紀　2015「インダス文明期の石製装身具研究の現状と展望」『西アジア考古学』16: 13-29.
上杉彰紀　2020「インダス考古学の現状と課題」『西アジア考古学』21: 61-80.
上杉彰紀・小茄子川歩　2008a「インダス文明社会の成立と展開に関する一考察」『西アジア考古学』9: 101-118.
大津忠彦･常木　晃･西秋良宏　1997『西アジアの考古学』同成社 .
鎌田博子　2000「インダス文明の起源　－モエンジョ・ダロ下層併行期の性格」『考古学雑誌』85 (3): 37-59.
禿　仁志　2010「バローチスターン初期農耕文化の年代に関する覚え書き」『考古学の扉』3: 67-82.「考古学の扉」同人会 .
禿　仁志　2011「バローチスターン・メヘルガル遺跡の年代について」『東海史学』45: 37 ～ 48. 東海大学 .
辛島　昇・桑山正進・小西正捷・山崎元一　1980『インダス文明　－インド文化の源流をなすもの』日本放送出版協会 .
クレンゲル、H.（江上波夫・五味　亨訳）　1983『古代オリエント商人の世界』山川出版社 .
桑山正進　1975「インダス文明に関する最近の理解」『MUSEUM』293: 4-11.
小磯　学　2008a「インダス文明の腐食加工紅玉髄製ビーズと交易活動」『古代文化』60 (2): 95-110.
小磯　学　2008b「カーンメール遺跡出土の紅玉髄製ビーズとペンダント」『大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　総合地球環境学研究所プロジェクト　環境変化とインダス文明　2007 粘土成果報告書』73-82.
小磯　学・小茄子川　歩　2009「インダス式印章のサイズとその意義」『日々の考古学』2: 397-418、東海大学文学部考古学研究室編 .
小泉龍人　1988「北方インダス流域平原部における先ハラッパー諸文化の一考察」『インド考古研究』11: 1-40.
後藤　健　1997「アラビア湾岸における古代文明の成立」『東京国立博物館紀要』32: 11-44.
後藤　健　1999a「遺物の中の異物　－インダス文明の遺物から」『考古学雑誌』84 (4): 70-88.
後藤　健　1999b「古代湾岸文明と文献史」『古代オリエントにおける都市形成とその展開　平成 8 ～ 10 年度科学研究費補助金研究成果報告書』22-38.
小茄子川　歩　2007「インダス式印章のデザインシステム　－印面に刻まれた図像の構造と変遷を手がかりとして」『東海史学』41: 67-89、東海大学史学会 .
小茄子川　歩　2008a「コート・ディジー式土器とハラッパー式土器　－ハラッパー式土器の起源に関する一考察」『古代文化』60 (2): 70-83.
小茄子川　歩　2008b「「都市」と「伝統」の創出　－彩文土器の変容からみたインダス文明の成立と展開」『考古学研究』55 (1): 47-67.
小茄子川　歩　2011「右向きのモチーフが刻まれたインダス式印章　－ハラッパー文化の多様性に関する一考察」『西アジア考古学』12: 15-32.
小茄子川　歩　2012『インダス文明成立期における印章の製作技術とその変遷に関する考古学的研究（分析資料）, 平成 23 年度 三島海雲記念財団 学術研究奨励金 人文科学部門（史学）報告』.
小茄子川　歩　2013「インダス式印章の「発明」：インダス式印章の総合的理解に向けて」『インド考古研究』34: 80-82.
小茄子川　歩　2016『インダス文明の社会構造と都市の原理』同成社 .
小茄子川・中山誠二　2012「レプリカ・セム法によるインダス式印章の観察」『日本西アジア考古学会第 17 回総会・大会要旨集』.
小西正捷　1970 「インダス文明の興亡に関する気候学的水利学的知見　1 ～ 4」『水利科学』72: 71-90; 74: 121-140; 75: 78-94 頁 .
小西正捷　1977-8「バハレーン考古紀行（1）～（4）」『Circum-Pacific』8: 2-9; 9: 2-11, 12-26; 10: 2-17. 環太平洋学会 .
小西正捷　1990「紀元前 2000 年前後のアラビア湾岸」『文明発祥の地からのメッセージ　メソポタミアからナイルまで』162-178、クバプロ .
小西正捷・後藤　健　1988「湾岸考古学の現状と課題　－南アジア・西アジア考古学との関連から」『インド考古研究』11: 41-51.
近藤英夫　1994「インダス文明の興亡と環境変動」『古代文明と環境』126-146. 思文閣出版 .
近藤英夫・上杉彰紀　1999『南アジア考古学の歴史』東海大学文学部考古学科近藤研究室 .
近藤英夫　上杉彰紀　小茄子川歩　2007「クッリ式土器とその意義　－岡山市オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』21: 15-50.
ジェイコブス､J.　2016『市場の倫理　統治の倫理』筑摩学術文庫 .
宗臺秀明　1997「バローチスターン農耕文化とその展開」『物質文化』62: 1-21.
宗臺秀明　1998「ラフマーン・デーリ遺跡とコート・ディジー文化」『考古学雑誌』83 (4): 20-42.
宗臺秀明　1999「インダス地域の編年と課題」『古代オリエントにおける都市形成とその展開　平成 8 ～ 10 年度科学研究費補助金成果報告書』39-46.
宗臺秀明　2000「文明への長き歩み－インダス文明前史」『四大文明　インダス』、193-203.
宗臺秀明　2002「バローチスターン初期農耕文化と交易　－副葬品からみた交易と社会の階層化」『西アジア考古学』3: 21-32.
宗臺秀明　2009「インダス文明の形成と交易の役割」『文化財學雑誌』5: 8-39. 鶴見大学文化財学会 .
杉　勇　1978『古代オリエント集』筑摩世界文学体系 1. 筑摩書房 .
曽野寿彦・西川幸治　1970『死者の丘・沈黙の塔』新潮社 .
ターパル , B.K.（小西正捷・小磯学訳）　1990『インド考古学の新発見』雄山閣 .
ダーニー , A.H.（小西正捷・宗臺秀明訳）　1995『パキスタン考古学の新発見』雄山閣 .

常木　晃　1991「考古学における交換研究のための覚書 (2)」『東海大学校地内遺跡調査団 2』178-191. 東海大学校地内遺跡調査委員会 .
常木　晃 (編)　1999『食糧生産社会の考古学』現代の考古学 3. 朝倉書店 .
常木晃・松本健（編）　1995『文明の原点をさぐる　－新石器時代の西アジア』同成社 .
NHK（日本放送協会）　2000『世界四大文明インダス文明展図録』NHK.
中島健一　1977『河川文明の生態史観』校倉書房 . なお、付編に Wittfogel 1956 “Hydraulic Civilization（治水文明論）” の全訳が掲載されている。
野口淳・カシード　フサイン　マッラー・グーラム　モヒウッディーン　ヴィーサル・横山　真・千葉　史・下岡順直・ニローファー　シェイフ・近藤英夫　2017「インダス川中下流域における先史時代石器群の編年的考察　－ヴィーサル・ヴァレー遺跡群出土・採集資料の評価を中心に」『西アジア考古学』18: 47-63.
樋口隆康　1961「インド・パキスタンの古代文化」水野（編）1961: 88-108. 平凡社 .
樋口隆康　1979「概説・インド」有光教一（他編）1979、下巻、1396-1419. 平凡社 .
ビビー、J.（矢島文夫・二見史郎　訳）1975『未知の古代文明ディルムン　－アラビア湾にエデンの園を求めて』平凡社 (Bibby, G. 1969 Looking for Dilmun. New York: Alfred A. Knopf.）.
藤井純夫　2001『ムギとヒツジの考古学』世界の考古学 16. 同成社 .
水野清一（編）　1961『世界考古学体系 8　南アジア』平凡社 .
米山あかね　2006「文明以前インダス川流域とバローチスターンの精神世界　－土偶から見る地域間交流」『インド考古研究』27: 103-109.
米山あかね　2008「土偶の用途と社会変化　－インダス文明以前とインダス文明期の土偶を対象に」『インド考古研究』29: 51-76.
山下博司　2008「インダス文明と宗教　－神観念や生命観の問題に触れて」『大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　総合地球環境学研究所プロジェクト　環境変化とインダス文明　2007 粘土成果報告書』141-153.

筆者の恩師である故立教大学名誉教授小西正捷先生の墓前にこの拙文を捧げる。